

「みんなの SDGs」
2022 年度第 2 回オンラインセミナー
SDGs と複合的な危機
～SDGs 達成に向けた連帯を beyond SDGs の議論の端緒に～
報告書

2022 年 10 月 11 日

1. 背景と目的

- 日本と世界が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）目標年に向けて取り組む中、人々の生命や生活、尊厳を脅かすコロナ禍やウクライナ危機、それに伴うエネルギー・食料危機の発生など、世界の情勢は混迷を極めている。
- 更には、地質学の新しい時代区分として提唱されている「人新世」においては、人類が産業革命などを通じて地球規模の環境変化をもたらした影響が気候危機等の形で将来のリスクとして表出しており、SDGs が提起する人類社会の将来展望とも深く関わっている。
- みんなの SDGs の構成団体は、過去にも 2015 年以降の世界の開発課題のあり方（ポスト MDGs）に関しての様々な意見を集約し、日本政府に提言することを目的としたサイト「Beyond MDGs JAPAN」を開設し、投稿頂いたご意見を各種シンポジウムや同サイトを通して対外発信してきた。
- 今回のセミナーは、beyond SDGs の議論の端緒として、複合的な危機下においてもなお SDGs 達成に向けた取り組みを進めている関係者からの事例報告をもとに、「人新世」の時代に求められている、より大きな連帯を生み出すためのヒントを得ることを目的とする。

2. 開催日時 2022 年 10 月 11 日（火）18:30-20:30（MS Teams によるオンラインセミナー）

3. プログラム

第一部：以下 3 名の方に 1 人 20 分ずつ各テーマについてお話しいただき、各報告の後に質疑応答を行います（75 分）。

- ① より大きな連帯を生み出すために、いかに非当事者を巻き込むか
山本 和奈氏（起業家・アクティビスト）
 - ② 人間の安全保障から見た新たな脅威と必要な連帯
星野 俊也氏（大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授）
 - ③ 共感資本主義で、SDGs 達成といのちの輝きを支える
堂目 卓生氏（大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI）長）
- （※山本和奈氏は 19:30 までの登壇予定）

第二部：パネル形式で、複合的な危機下において SDGs 達成に向けた取り組みをいかに推進できるか、第一部の各報告をもとに意見交換を行います。登壇者とモデレーターとの議論を通じ得られた論点の一部については、本年 10 月末～11 月初旬の間に開催予定の「SDGs 実施指針改定に関するパートナーシップ会議（第 2 回）」に向けて、日本の SDGs の取り組みや政策に関する提言を導出することを目指します（35 分）。

モデレーター：佐藤 寛氏（国際開発学会社会連携委員会/アジア経済研究所）

総合司会：木村 聖氏（JICA 企画部イノベーション・SDGs 推進室）

.....第 1 部.....

木村 皆さま、本日は『みんなの SDGs』2022 年度第 2 回のオンラインセミナーにご参加いただきましてありがとうございます。本日は『SDGs と複合的な危機～SDGs 達成に向けた連帯を beyond SDGs の議論の端緒に～』と題しまして、2 部構成でお送りします。

まず第 1 部では beyond SDGs の議論の端緒として、複合的な危機下においても、なお SDGs の達成に向けた取り組みを各所で進めている関係者からの事例報告を基に、『人新世』と呼ばれている時代に求められている、より大きな連帯を生み出すためのヒントを得られればと、登壇者 3 名の方をお招きしております。引き続き、第 2 部ではパネルディスカッションということで、日本政府が現在コメントを求めています SDGs 実施指針改定に関するパートナーシップ会議に向けての政策提言の導出も目指しています。2 時間にわたるプログラムとなりますが、最後までお付き合いよろしくお願いいたします。

私は本日、司会を務めます JICA 企画部イノベーション・SDGs 推進室の木村と申します。よろしくお願いいたします。開始前に一つお知らせですが、本日は耳の聞こえない方向けに、Teams の自動字幕機能をオンにして、トランスクリプトを配信する予定にしております。ご利用希望の方は、画面に共有しているとおり、「トランスクリプションを表示する」をクリックして、字幕をオンにしてご覧いただければと思います。なお、本日のセミナーのアーカイブ配信は予定しておりませんが、後日、報告書データを作成してホームページに掲載いたしますので、そちらもご参照いただければと思います。

それではまず第 1 部、初めの登壇者として、事前のご案内から順番に入れ替わっており恐縮ですが、ドイツ在住の山本さんから『より大きな連帯を生み出すために、いかに非当事者を巻き込むか』と題しまして、20 分でお話しいただければと思います。山本さん、よろしくお願いいたします。

山本

より大きな連帯を生み出すために、
いかに非当事者を巻き込むか



一般社団法人Voice Up Japan代表理事

山本和奈

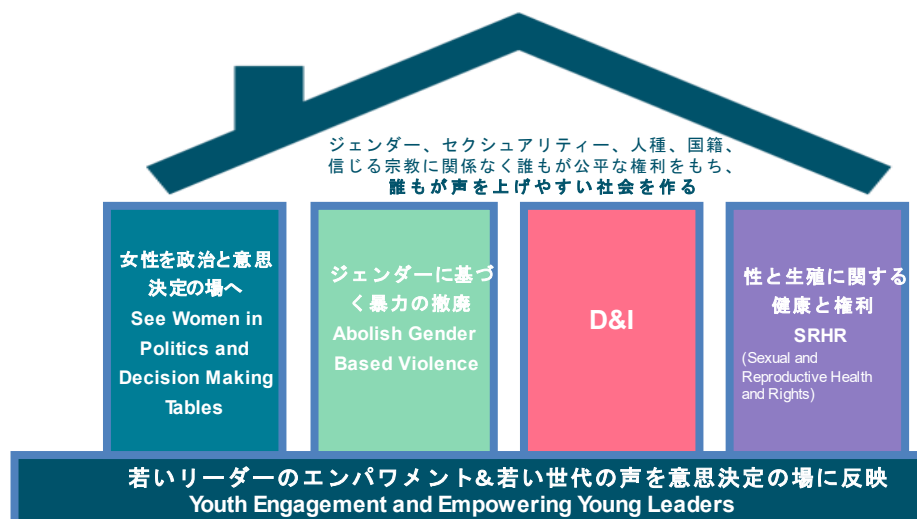
ご紹介いただきました一般社団法人 Voice Up Japan の代表理事を務めております山本和奈と申します。普段はドイツで自分の起業をしていたり、主にベンチャーキャピタルであったり、スタートアップの投資支援、ビジネスデベロップメントなどを行っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



ジェンダー、セクシュアリティ、人種、国籍、
信じる宗教に関係なく誰もが公平な権利をもち、
誰もが声を上げやすい社会を作る

本題に入る前に、今回の『大きな連帯を生み出す』というトピックは、私たちが Voice Up Japan で行っていることとすぐくつながっていることから、まず団体の紹介をしていきたいと思っております。Voice Up Japan は 2019 年に始まった団体で、現在はジェンダー、セクシュアリティ、人種、国籍、信じる宗教に関係なく、誰もが公平な権利を持ち、誰もが声を上げやすい社会をつくることを目標として活動しております。

Pillars（柱）& Foundations（土台）



活動の主な柱、Pillars としては、四つの Pillars がありまして、その下には若いリーダーのエンパワーメントと若い世代の声を意思決定の場に反映するという土台の基から四つの Pillars で活動しております。

私たちが活動する範囲としては、一つ目が『女性を政治と意思決定の場へ』、二つ目が『ジェンダーに基づく暴力の撤廃』、三つ目が『ダイバーシティ・アンド・インクルージョン』、

そして最後が『性と生殖に関する健康と権利』、SRHR に関する課題などの解決に向けて、アドボカシーだったり、教育のイベントだったり、勉強会だったり、もしくは大学などに関する声明文の提出だったり、あとは国会議員の先生とのロビイング、署名活動など、幅広く活動を行っております。

Voice Up Japan ので行ってきたこと

- ・400名を超えるメンバー、そして全国25箇所に学生支部の立ち上げ支援
- ・ストリートハラスメントの第三者介入を促す「アクティブバイスタンダードトレーニング」の実施（協力団体：ロレアルパリ）
- ・性暴力の刑法改正を求める署名活動やロビイング
- ・「差別とマジョリティの特権」に関するシリアルイベント
- ・4大学共通で性的同意の調査及び大学に対する意見書の提出、性的同意のハンドブックの作成など



また、さらに少し活動内容に踏み入れていくと、現在 400 名を超えるメンバーで、そして今は全国 25 カ所に学生支部の立ち上げ、支援というのを行っております。現在は 24 大学と一つの高校生支部がありまして、一番日本の北だと青森県、そして南までいくと長崎の長崎外国語大学にて、学生支部が存在しております。

その他には現在、ロレアルパリ様に協賛をいただいているストリートハラスメントの第三者介入を促すアクティブ・バイスタンダード・トレーニングの実施。性暴力の刑法改正を求める署名活動やロビイング、差別とマジョリティーの特権に関するさまざまな複合的差別に注目を当てたシリアルイベント。また 4 大学共通で行われた、性的同意の調査および大学に対する意見書の提出。性的同意ハンドブックの作成など、先ほど言った 4 つの Pillars を軸にさまざまな活動を行っております。

連帯の大切さ

- ・ **"If you want to go fast, go alone; but if you want to go far, go together."**

“早くいきたいのであれば、一人でいきなさい：遠くに行きたいのであれば、一緒に行きなさい”

Voice Up Japan 内で心がけてること

- ・「声を上げる」ことは人前に出て、話したり訴えかけることなく、自分達ができる範囲で行うこと。
- ・ジェンダーやセクシュアリティ、国籍、宗教、人種、話せる言語関係なく参加できるようにする（コミュニケーションの日英徹底）
- ・コミュニティー（大学・地域）に特化した活動の支援

私たち Voice Up Japan としては、さっき少し言ったように現在 400 人のメンバーがいるのですが、もともと 2019 年に始まったときは、私を含めた 5 人だけでした。そこまですぐ伸びたかというところ、私たちの信念とした英語でいう『If you want to go fast, go alone; but if you want to go far, go together.』早く行きたいのであれば 1 人で行きなさい、遠くに行きたいのであれば一緒に行きなさいということを、私たちの中でのメッセージとして大切にしております。そこでどれだけの多くの人を巻き込んで、多くの人に参加できる、参加をしやすい団体にするかというところで、現在、心掛けていることを少しシェアしていきたいと思います。

一つ目が声を上げるということは、人前に出て話したり、訴えかけることではなく、自分たちができることをできる範囲で行うこと。これがすごく大事でして、他の団体さんとかを見ていると、前に出ないメンバーが参加をしにくかったり、顔を出せないメンバー、もしくは普段仕事があつて、本名使えない人などの受け皿になるような所が少なかった。だからこそ、私たち Voice Up Japan では顔や名前は全く出さないけれど、自分たちの普段の本業で行っていることを Voice Up Japan の中でやってもらったり、例えばデザイナーの皆さんにはデザインで貢献をしていただいたりなど、それぞれが自分たちができる範囲で、一緒に連帯をしていくということ大切にしております。

二つ目がジェンダーやセクシュアリティ、国籍、宗教、人種、話せる言語関係なく参加できるようにする。これは Voice Up Japan の中で、私自身もともと海外で育った経験もあって、そもそも英語のほうが日常的に使うことから、日本のさまざまな問題解決だったり、課題解決をしている団体に自ら所属をしようとしたときに「日本ではこうじゃないんだよ」とよく言われたりとか、帰国子女だから分からないという、ある意味、差別も結構ありまして。残念ながら、日本の団体さんだとまだ、日本だからこうしないといけない、英語しかしゃべれなかったら駄目というバリアーがあります。

あと、特にジェンダーの問題になると、さらにそのバリアーが広がっていて。なので私たちが Voice Up Japan 内で心掛けていることとしては、国籍も宗教も人種もジェンダーもセクシュアリティも関係なく、誰もが入れる、参加をできる団体にすること。また、コミュニケーションは必ず英語と日本語。特にミーティングなどは必ず英訳を付けたり、Instagram などでの広報なども必ず日英で行うということを徹底しております。

三つ目がコミュニティ。それは大学や地域に特化した活動の支援というのをしております。私が思うに、連帯がなぜ大切かというと、特に課題解決をしているような非営利団体だったり、私たちのようにアクティビズムやアドボカシーにフォーカスを当てている団体ってリソース、特に金銭的なリソースが少ないんですね。それは私たちだけでなく、他の団体さんも見ていると、ものすごく予算が海外の団体さんに比べると少ない。まだ日本だと、大学を卒業してから自分たちの活動だったり、課題解決を軸に食べていくことも難しかったりすることから、私たちとしては、リソースをいかに分担していくか、いかに共有することによってサープラスをつくっていくかというのを、すごく大事にしています。

例としては、同じプロジェクトであってもプロジェクトのエグゼキューション。実際の実施は長崎外国語大学、岩手大学、津田塾大学、早稲田大学で同時に行う。その代わり、元のリソースはみんなで時間を入れるから、より一人一人の、一つ一つの支部や団体が少ない貢献でも大きなものがつくれるということ、すごく大切にしております。

Voice Up Japan

- ・ **Impact First / インパクト（影響）にフォーカスを当てたゴール設定**
- ・ **言語関係なく参加できる団体にする**
- ・ **誰もが、自分のできる範囲での活動をする**
- ・ **個人個人の成長（Self Development）を大切にする（機会をを設ける）**
- ・ **知識やスキルの底上げを常に行う**

Voice Up Japan の少しまた深掘りしていった、こういったことを今は大事にしているかというと、一つは『Impact First』。どのプロジェクトであっても、どのゴール設定であっても、自分たちのインパクト、影響力にフォーカスを当てたゴール設定というのを各プロジェクト、各チームで徹底をしております。次が『言語関係なく参加できる団体にする』。これは前にも言ったことでもあるんですけど、連帯を強めるには、日本にはまだ日本語がしゃべれない人もたくさんいる。けど参加をしたい、貢献したいと思っている人もたくさんいる。だからこそ、そういった人の受け皿になれるような団体を目指しています。『誰もが、自分のできる範囲での活動をする』。無理をしないということですね。特にアドボカシーだったり、政治的活動、社会運動になると、バーンアウトしてしまう人が多いのが現状です。バーンアウトというのは、特にハードなスケジュールなどでアドボカシーを続けたり、これは仕事などにも影響することなんですけど、その理由からすごく精神的に身体的に疲れ果ててしまって、軽くうつになるような現状というのが Voice Up Japan だけでなく、他の団体さんの交流会をするときでも見られるので、取りあえず自分ができる範囲での活動をするということを大切にしています。

次が『個人個人の成長を大切にする』。これは連帯するにあたって、ものすごく大切なことだなと思ってて、連帯しても常に学び続ける必要はあると思うんですね。連帯したから OK だったり、横のつながりがあるから OK ではなく、いかに連帯してる状況で一緒に前に進んでいくかというのが大切だと思っています。最後には、『知識やスキルの底上げを常に行う』ということです。Voice Up Japan 内では現在、Voice Up Japan ゼミとマスタークラスというもので、例えば政治に関するトピックだったり、フェミニズムに関するトピックだったり、選択的夫婦別姓や日本の政治運動や社会運動に関する学びをしながらも、タイムマネジメ

ントだったり、マーケティングだったりデザインだったりといったスキルを身に付ける機会というのをメンバーに向けて設けております。

様々な団体やInstagramのアカウントがあるが、
関心のある人のパイが被ってきてしまってる。

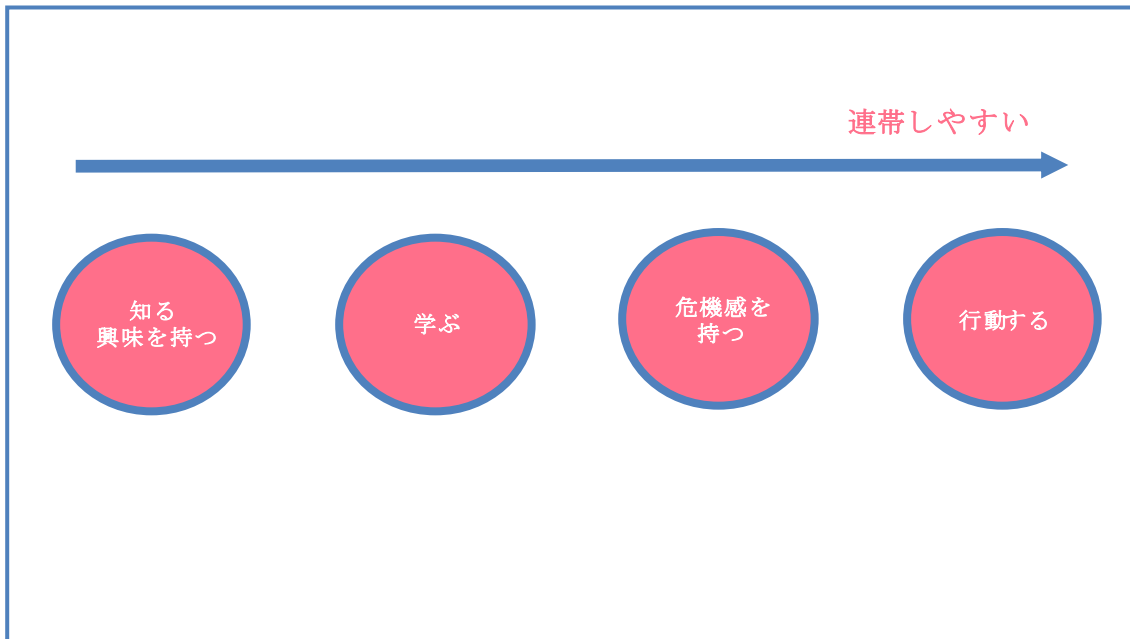
→新たな連帯が難しい

InstagramなどのSNSは個人の好みにあったアルゴリズムがあるので、新しい人に届かない

他の団体でも問題

ただ今回、連帯に関して、何がすごく難しいかなと思うのが、さまざまな団体、特に私たちのようなユースにフォーカスを当てている団体は他にもたくさんあるんですけど、関心ある人のパイがかぶってきてしまってる。つまり、私たちが行っているプロジェクトがあって、Fridays For Future さんがやってるプロジェクトがあって、NO YOUTH NO JAPAN さんがやってるプロジェクトがあっても大体、参加する人がかぶってきてしまってるというのが現状となると、もちろん、ここ3団体は連帯ができて、連帯をするそもそもの意味というのが不明瞭になります。これは私、個人的な意見なんですけど、自分たちの影響力をさらに高めることが連帯の鍵だなと思っていて、ただそこで、連帯が自分たちの中で終わってしまっていると新たな影響力というのが生み出せないからこそ、これが私たちの団体だけじゃなくて、他の団体さんでも課題として見ているのが現状です。

また、SNSを使ったアクティビズムだったり情報発信というものが、特にユースの若い団体とかは多いんですけど、InstagramなどのSNSというのは個人の好みに合ったアルゴリズムで、自分たちが目に触れるものが厳選されてしまっているんですね。なので、つまり新しい人には届かない。そもそも政治的なことを見ない人、読まない人。ジェンダーに関すること、社会運動に関すること、SDGs に関すること、気候変動に関することを読まない人、興味ない人、あんまり知らない人には届くことがものすごく困難になってくるんですね。なので今、私たちとしても、どうやってもっと今後の影響力を高めていくかというところで、これは私が先週作ったマップではあるんですけど、人の関心における連帯のしやすさというものを作りました。



ファーストステップとしては、知る、興味を持つ人。例えば、ここに参加をしてる皆さまのようにアクティブに行動していたり、自分たちの本業を通して社会課題の解決に向かっている人とは違って、そもそも最近 SDGs って何だろうぐらいな、男女不平等なんてあるの？みたいな、それぐらいのレベルの人が知る、興味を持つというところ。その次の段階で、学ぶ、危機感を持つ、行動するというような流れがあると思っています。私たちとしては、この4つの段階、ステップに分けて、いろいろな人の受け皿になれるような活動というのに、今少しずつフォーカスを当てている状況です。

私たちが今やっていること（途中経過）

- 全てのプロジェクトKPIをきちんとつける
- 自分達が解決したい問題に対して影響あるひと 影響する人を考え
- アイディアを出していく
- アイディアの影響力×実現可能性を考える
- 影響力を最大限にするためにアクションを考えていく

これを話す前に、また私たちがやっていることについて話していくんですけど。これはもともと私が今、2社目を立ち上げて最中なんですけど、起業だったりスタートアップの世界から来てるからこそ、Voice Up Japanにはビジネス的なリーンスタートアップ的な、もちろん賛否両論もあるんですけど、メソドロジーを含めたり、デザインシンキングのメソドロジーを踏まえて、自分たちの成長計画だったり、どういうふうにもっとインパクトを高めていくかということを基本的に話し合っているんですけど。一つは、全てのプロジェクトに

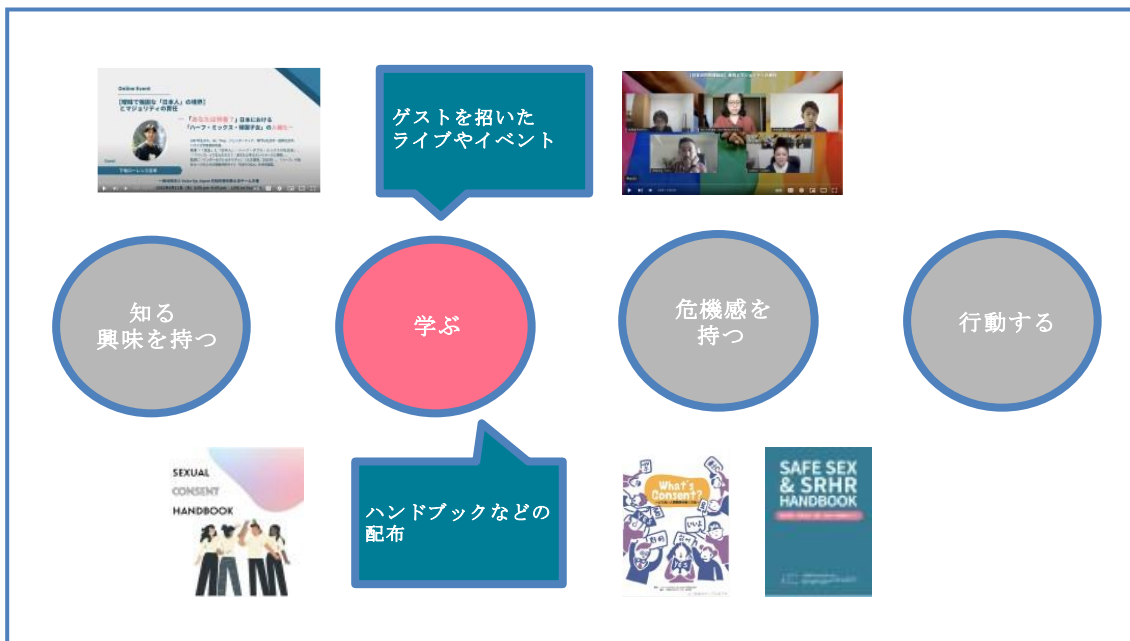
KPI を付けるということですね。それはどんなに小さい、それこそ大学内のプロジェクトであつても、KPI の大切さだったり、5、6 時間かけて各学生支部と、それぞれのリーダーだったり、コーチなどがどうやって KPI を付けていくのかという話し合いをしたり。

あとは次にやるのが、KPI を付けてから、自分たちが解決したい問題に対して、影響力がある人や影響される人というのを考えていく、マッピングしていく。その次に、その人たちにインタビューをしてから、いろいろなアイデアを出していく。そのアイデアを出してから、アイデアというのをどれぐらいの、横線に影響力があつて、実現可能かという x と y のグラフにして、自分たちのアイデアの実現の可能の高いもの、そして影響力が高いものというのを洗い出していく。

その次に、決められたアクションに対して、またさらに影響力を最大限するために、どうしたらこのアクション、このプロジェクト、もっとうまくいくかというふうなメソドロジーを今、学生たちと共にやっている途中なんですけど。



その背景があつて今、また話が戻るんですけど、まず Voice Up Japan として『知る、興味を持つ』という方に対して、SNS の情報発信だったり、不特定多数の人の目に付くように、学内、特に大学生、メンバーたちは学内でポスターを張ったり、学園祭などで展示会をしたりというのをやっております。



またそこで興味を持ってくださった人、知って面白いなと思ってくださった人には、学ぶ機会を提供する。それはゲストを用いたライブやイベント行うことだったり、ハンドブックなどの配布など行っております。現在 Voice Up Japan では、六つのハンドブックがありまして。性的同意に関するハンドブックが三つ。産婦人科に関するとか、SRHR に関するハンドブックが一つ。もう一つがセーフセックスと SRHR ハンドブックという、現在、多分ここに参加しているジョイセフさんに監修をしていただいているんですけど、大学生に知ってほしい、大学生による大学生のためのセックスや SRHR に関するハンドブックの作成。また最後には、大学内でこういったリソースがあるのか。性暴力被害に遭ったときにはどこに行けばいいかなどのリソースのハンドブックを作っております。なので、こういった形で興味を持った人がさらに自分たちの知識を深めるための学ぶ機会。



その次が、危機感を持たせる。危機感に関しては、多くの署名活動だったりに参加したり、デモに参加したり、意見書を書いたり、記者会見を行ったり、緊急ライブを行ったりという形で、さまざまな危機感を持たせることをやっております。学ぶと危機感を持つというところは、私たちのアクションとしてはちょっと交差するところもあるんですけど、そこで、ある問題に対して知識を持った人が、この問題は今、解決しないと駄目なんだという危機感を行動を通して見せる。



最後、行動に移す、行動するんだと思うんですけど、まず私たち Voice Up Japan としてはどうやって行動すればいいのかというところで、自分たちでもっとアクティブにアクションを立ち上げたいという学生に対しては、8週間のプログラムを用意してまして。デザイン思考という、スタンフォードでもともと発明されたわけではないんですけど、よく使われているビジネスデザインだったり、プロジェクトをつくる時に使われるメソドロジーを使ったワークショップを行って、まだジェンダーに対して興味を持っているという段階の学生たちが『知る』、『学ぶ』、『危機感を持つ』、『行動する』まで8週間で毎週のワークショップを通して行って、最終的にはそれぞれのチームが自分たちのプロジェクトを立ち上げて活動を始めるというワークショップを行っていたり。もしくは社会人メンバーの場合は、社会人だったり、学生ではない方の場合は、私たちのメンバーとして入ってもらって、自分たちのできる範囲での行動ということを行っております。本日、連帯ということがトピックなんですけど、私たちとしては、そもそも連帯に持つていくまでには、あらゆるステップがあるかなと思ってて。ただ、行動したいとか、何とかしたいと思ってる人は、行動をしているのが現状なんですね。なので、私および Voice Up Japan ですごく思うのが、新しい人をどうやって興味を持たせるか。それこそ最近、政治活動だったり、選挙運動、選挙に行くことを促す団体なども増えていて。特に 10 代 20 代の投票率ってあんまり上がってなかったり、まだまだ投票しない人が多い。なので、さっき口頭で言ったように、そもそものパイ

というのが広がっていき、いろいろな団体で、同じ人がパイにいるというのが現状なので、いかに新しい人に興味を持ってもらうか。このパネルというのは、徹底するのが大事だと思っております。

連帯を生み出すには

- 誰と連帯をしたいか（ペルソナ）を考える
 - その人がどうやって情報を収集してるのか、どんな話題に興味があるのか、を考える
 - その人に届きそうな情報を SNS で発信をしたり、興味のあるような著名人とコラボをしたり、その人が行きそうなところでの広報
- 関心を持たせるコミュニケーションを行う
 - **Pathos, Logos, Ethos**「ロゴス（論理）」「エトス（信頼）」「パトス（感情）」
 - 目に入りやすいコンテンツを作る（わかりやすい投稿・リツイート）

これはまた、ビジネスとしても、私たちでも使ってることなんですけど、なので連帯を生み出すには、今回のパネル以外にも何をしなければいけないのか。一つは誰と連帯をしたいか。そのペルソナをきちんと考える。ただ単に多くの 20 代の日本人に届けたいではなくて、どういったビジネスで使うペルソナ。その人の年齢、何を勉強したか、どういう家族構成かぐらいのペルソナをつくっていったら、その人がどうやって情報を収集してるのか、どんな話題に興味があるかを考えてくる。そうすると、その人に届きそうな情報を SNS で発信したり、興味のあるような著名人とのコラボをしたり、もしくはその人が行きそうな所での広報というのが、もっとターゲティングすることが可能になっていきます。

二つ目が関心を持たせるコミュニケーションを行う。私がもともとパブリックスピーキングなどをやったときには、ものすごくパトス、ロゴス、エトスをうまく使わなければならぬとされています。もともとパトス、ロゴス、エトスというのは、この三つをきちんと取り入れないと、人に情報を伝えるのが難しいというのがそもそもの原理なんですけど。なので Voice Up Japan として、特に私個人としても話すとき、スピーチを行うときもそうですし、投稿を作るとき、配信をするときなどは必ずこの論理を使って信頼を持てる、信頼性のある人を例えば引用していく。もしくは感情を使って、その人が感情移入するような三つのエッセンスを使ったコンテンツを作っていく。また、その次に目に入りやすいものを作る。分かりやすい投稿をしたり、特に若い世代にリーチするためにはリールだったり、TikTok を使用して新しい人をこのパネルに連れてくることを大事にしています。

連帯を生み出すには

- 受け皿を作る
 - 他の人の意見を聞ける場所、匿名で感じているモヤモヤを共有できる場所
 - 情報発信が届く場所（メーリス）
- 深く学ぶ機会を作る
 - ディスカッションできるコミュニティー
 - 深掘りしたイベントや勉強会
- 危機感を持たせる
 - インスタライブやイベントなどで事態の緊急性を訴える
 - 署名などを行って人が一歩踏み出したり、共有できる媒体を作る

最後に受け皿をつくっていく。他の人が意見を聞ける場所。匿名で感じて、もやもやを共有できる場所、情報発信が届く場所。あとは学ぶ機会をつくっていく。ディスカッションができるコミュニティーだったり、深掘りしたイベントや勉強会。危機感を持たせていく。インスタライブやイベントなどの事態の緊急性を訴えること。署名などで、人が一歩踏み出したり、共有できる媒体をつくる。

連帯を生み出すには

- 連帯に持っていく
 - 個人個人がどうやって社会を変えるか、行動の仕方を発信する
 - 積極的に参加できるチャンスを作っていく
 - どんどんリーダーシップを育ていく

最後、そこから連帯に持っていく。個人個人がどうやって社会を変えるか、行動の仕方を発信したり、積極的に興味を持った人、行動したい人、連帯したい人が参加できるチャンスをつくっていく。そして最後にすごく大事なのが、それを次に持っていくリーダーシップをどんどんつくっていくことが大事だと思っています。



 **Instagram @voiceupjapan**
 **Twitter @voiceupjapan**
 **Website voiceupjapan.org**
 **kazuna.yamamoto@voiceupjapan.org**

本日は短い時間の中、いろいろなトピック触れたと思うんですけど、私たちがVoice Up Japan として、ここ3年間やってきたことを少しまとめたスライドでもあるので、どうかご参考になればと思います。本日はどうもありがとうございました。

木村 山本さん、ご発表ありがとうございました。ビジネス領域で使われているようなさまざまなメソドロジーも使いながら、当事者だけでなく、共感した若者をどうやって巻き込んでいるかといった具体的なお話をいただきまして、大変参考になりました。

山本さんにはこの後のご都合があり、パネルディスカッションに同席がかなわないということですので、山本さんの発表内容に関するご質問があれば、この場でいただいた後に、次の発表に移りたいと思います。視聴者の方で何かご質問があれば、リアクションボタンで挙手いただくか、ご発言いただければと思います。

この場ではご質問はないということでしたら、今、画面でも共有いただいている各種SNSやメールアドレスで山本さんにコンタクトできるかと思いますので、本日をきっかけに、山本さんの活動に皆さん、ご注目いただければと思います。それでは山本さん、ご発表ありがとうございました。

山本 ありがとうございます。

木村 続きまして第1部、お二人目の発表に移りたいと思います。『人間の安全保障から見た新たな脅威と必要な連帯』ということで、大阪大学の星野先生からお話いただきます。星野先生、ご準備ができましたら、よろしくお願いいたします。

[illegible]

16

なぜこれを私が紹介するかというと、この特別報告書作るというときのバックグラウンドペーパーの執筆者の1人として参画したこと。そして現在、同報告書の日本語版が作られていて、私が監訳者をしていることが理由の一つになります。また、この報告書は世界のハイレベルの諮問パネルが設置され、日本からは参議院議員で世界保健機関（WHO）のユニバーサルヘルスカバレッジ親善大使もされてる武見敬三先生と、チンチージャさんといってコスタリカの元大統領、この2人がその共同議長となって進められた議論も踏まえて作成されたわけなのですね。昨年5月から9カ月ほどのこのハイレベル諮問パネルの議論のプロセスにも深く関わったということもありまして、その内容面の新しさも含めて、ぜひお話ししたいというふうに思った次第です。

さらにもう一つお話をすると、僕は国際政治、あるいは国際安全保障の専門なんですけれども、もともとの学者としての恩師が緒方貞子先生で、その緒方先生が人間の安全保障という概念を2003年の国連事務総長の諮問委員会の報告書の共同議長の一人として世界に広めたという経緯もあることから、今回、その概念のアップデート版を自分が関わるご縁を得たことは自身にとっても非常に荣誉あることですので、そんなことも踏まえてお話ししたいと思っているわけです。

第77回国連総会における岸田総理大臣一般討論演説

歴史の分水嶺に立つ今だからこそ、日本は、国連に対する強い期待を持ち続けます。時代は変われど、変わらないもの。それは国連の理念と原則です。私は、その確信を持って、みなさんと共に国連の強化に向けた道のりを歩んでいく決意であります。

改めて日本の国連、そして多国間主義への強いコミットメントを示すべく、本日私はここに国連の理念実現のための日本の決意を表明します。その内容は、

まず第1に、国連憲章の理念と原則に立ち戻るための安全保障理事会を含む国連の改革、そして、軍縮・不拡散も含めた国連自身の機能強化です。

第2に、国際社会における法の支配を推進する国連の実現です。

第3に、新たな時代における人間の安全保障の理念に基づく取組の推進です。



もっとも、こうした報告書が出たからといって、それが一体何になるのかというふうに思う向きもあるかもしれません。人間の安全保障は実践されてこそ意味があるんだと思います。しかし、日本政府もいま、一定の関心や重点を置いてることを示す例としては、本年9月20日、国連総会で岸田総理が演説をされました。歴史の分水嶺に立つ今だからこそ、日本は国連に対する強い期待を持って、そして国連の理念実現のために日本の決意を表明するという演説をしたわけですけども。その中で、3つの重点項目を掲げており、その中の3番目に、新たな時代における人間の安全保障の理念に基づく取り組みを推進するとの意向を、すなわち、早速この報告書の方向性を踏まえて行動に移そうという意向を示したことに

は意を強くいたしました。

その具体的な例というのが、実はこの8月に開催された TICAD8 ですよ。アフリカ開発会議というものですけれども、アフリカの国々の発展、成長のためにどうするかといったときに、人間の安全保障の考え方も十分活用できるのではないかということが強調されました。ですから、この報告書を作ったということで作りっ放しにされるのではなくって、それをいかにメインストリーム化していくかということ、そして、国際社会において実践につなげていくかが問われているということなんですけれども、その中心の戦略として新たに「連帯」という視点が強く浮かび上がってきたわけなので、きょうのテーマにも合わせて、そのあたりから少し議論をご紹介しますしていきたいというふうに思った次第です。

人間の安全保障概念の発展

従来の人間の安全保障の考え方：

人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す、との考え方。



国連開発計画（UNDP）の1994年版人間開発報告が提唱。

国家単位の開発に加えて、「人間開発」を提唱（1990年）

続いて、国家本位の安全保障に加えて、「人間の安全保障」を提唱
ただし、国家安全保障を代替するものではない、との理解。

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/bunya/security/index.html>

多くの方がすでに人間の安全保障という概念についてはお聞きになられたこともあると思うんですけれども、一般には、「人間一人一人に着目をして、生存、生活、尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立あるいは社会づくりを促す」という考え方で。よく知られているように、国連開発計画の1994年版の『人間開発報告書』というところで提唱されました。これは先ほど山本さんもおっしゃっていたアイデアのもつパワーという観点からすると非常に画期的だったと思うんです。というのも、従来、開発といったときには、どうしても国家単位で、それまでは開発を考えていた。それに人間開発（ヒューマン・ディベロップメント）という新たな視点を取り入れられたということが一つ。ですから GDP、GNP のような指標からは漏れてしまうような人々の開発がしっかりと進んでるのか。教育、保健、医療、福祉といった側面も含めたような開発の視点を入れた。これは画期的だったと思うんですね。これが1990年のことでした。

人間の安全保障概念の展開

緒方貞子国連難民高等弁務官（当時）とアマルティア・セン・ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ学長（当時）を共同議長とする「人間の安全保障委員会」の報告書“Human Security Now”（2003年）でさらに精緻化。



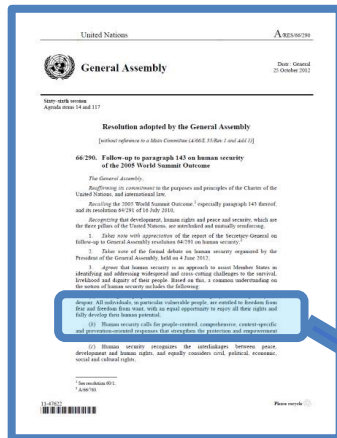
人間の安全保障とは「人間の生にとってかけがえない中枢部分を守り、すべての人の自由と可能性を実現すること」と定義され、人々の生存・生活・尊厳を確保するため、人々の「保護（プロテクション）」と「能力強化（エンパワメント）」のための戦略の必要性を提唱。

続いて、従来、国家本位の安全保障という考え方が主流だったところに加えて、人間の安全保障（ヒューマン・セキュリティ）も大事なんじゃないかというふうに、人間一人一人を見る視点というのが出てきたということです。これはもちろん、国家安全保障に意味がなくなったということでも、国家安全保障に代わるものでも決してありませんけれども、しかし新たな人間中心の視点が出てきたということで意味があったわけですね。

その後、先ほど申し上げたように、緒方貞子国連難民高等弁務官(当時)と、ケンブリッジ大学のアマルティア・セン学長が、アナン国連事務総長(当時)の諮問委員会の共同議長として2003年に『人間の安全保障委員会報告書』を出した。そのときには、「人間の生にとってかけがえない中枢部分を守って、全ての人の自由と可能性を実現する」と定義をして、人々の生存、生活、尊厳を確保するために「保護（プロテクション）」と「能力強化（エンパワメント）」と2つの戦略を出したという動きがありました。

緒方貞子先生は、国連難民高等弁務官をされた後は、木村さんもいらっしゃる国際協力機構（JICA）の理事長もされましたので、人間の安全保障を実践されたということですし、なぜ、そもそも人間の安全保障のことまでも考えなければいけないかとお考えになられたかというと、紛争を逃れてくる多くの難民の人々ですよね。その一人一人をどのように保護するか、エンパワーするかという問題意識があったことに由来します。それは、極度の貧困な状況にある人々にどうエンパワーするか、保護するかというアマルティア・セン先生の考え方にも反映されたというふうなことだと思いますね。これは今の時代においても非常に重要だと思います。こうした新しい考え方が出てくると、国際社会でいかにそれを主流化していくか、そして、いかにそれを政策の概念として活用していくかということが重要となって進んでいくわけなので、国連で決議に盛り込むなどしていろんな努力がなされました。保護する責任概念との区別の明確化などと言うと、これまた違う議論になってしまうんですけども、かなり政治的な議論とも関わってくるということがありました。

人間の安全保障概念の展開



2012年9月の国連総会では人間の安全保障に関する総会決議 (A/RES/66/290) を採択。

「人間の安全保障は、加盟国が人々の生存、生計及び尊厳に対する広範かつ分野横断的な課題を特定し対処することを補助するアプローチである」として、人間の安全保障の概念に関する共通理解を形成。

特に、「保護する責任」概念との区別の明確化！

3. *Agrees that human security is an approach to assist Member States in identifying and addressing widespread and cross-cutting challenges to the survival, livelihood and dignity of their people. Based on this, a common understanding on the notion of human security includes the following:*

(a) *The right of people to live in freedom and dignity, free from poverty and despair. All individuals, in particular vulnerable people, are entitled to freedom from fear and freedom from want, with an equal opportunity to enjoy all their rights and*

人間の安全保障概念の展開

2015年の国連サミットで合意された「持続可能な開発目標（SDGs）」では、「人間の安全保障」という表現は使われなかったが、その考え方は「人間中心」「誰一人取り残さない」という包摂性の観点で反映されている。



そして、きょうは『みんなのSDGs』という議論ですから、SDGs との関係を示し上げますと、SDGs の中に人間中心の考え方、「誰一人取り残さない」という考え方が含まれています。それは人間の安全保障の発想、考え、アイデアを反映している考えられています。しかし、国際政治の現場ではこの当時、人間の安全保障論が人道的な介入につながるという認識から抵抗する勢力がありましたから、この言葉自体は直接入らなかったという経緯がありました。そうしたプロセスを経たにもかかわらず今 2022 年になると新たに人間の安全保障に関する特別報告書が出されることになったわけですが、では、なぜ今なのかと。そして、今までの人間の安全保障と何が違うのかといったことが疑問に思われると思います。

そのきっかけは、直接的にはコロナだったと思いますね。新型コロナウイルス感染症がグローバルに広がっていく。そして人々の生存に関わる、つまり、生きるか死ぬかというふうな健康問

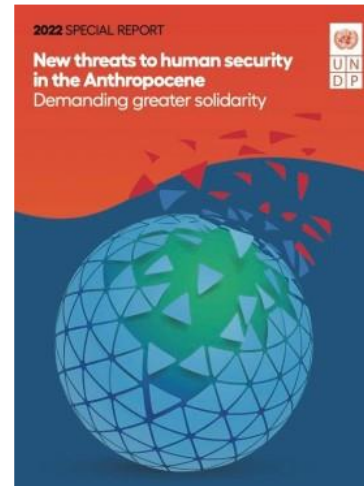
題に直結するのとともに、それが人々の生活にもダイレクトに波及をし、さらにさまざまな差別というか偏見というか、いろんなものにもつながっていくという形で、トータルに人々の安全保障につながるような問題が発生したんだと見ることができる。

人間の安全保障概念の展開

UNDPの2022年特別報告書『人新世の脅威と人間の安全保障：さらなる連帯で立ち向かうとき』のエッセンス：

新型コロナウイルスや気候変動など、現代の進化する脅威に対応する新たな時代の人間の安全保障アプローチを提示。

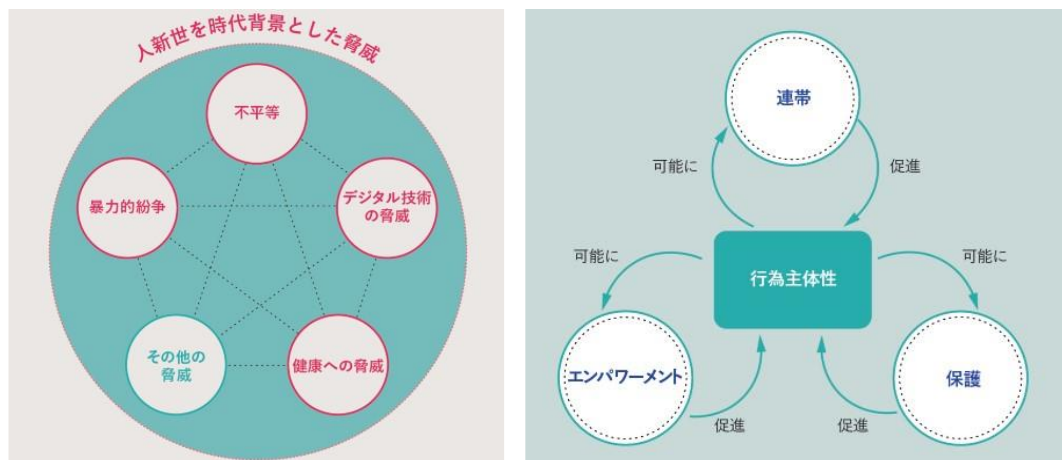
特別報告書では、人新世における人間の安全保障への新たな脅威として、技術、暴力的紛争、不平等、保健の4つの脅威を取り上げ、これらの脅威に対処するために、「保護」と「能力強化」という伝統的な人間の安全保障の2つの柱に加えて、「連帯」という第3の柱の必要性を提唱。



また気候変動といって、後に議論する「人新世」ですよね。つまり人間の行動が地球や生態系に大きな影響を及ぼすという時代背景を認識する必要があったというのが非常に大きなことだったんじゃないかなというふうに思います。

僕は大学の教員ではありますが、2017年から2020年は日本の国連大使として、ニューヨークの国連日本政府代表部で、主にSDGs関係の議論を担当しておりました。そして、恩師の緒方貞子先生の人間の安全保障の考え方を広く普及されることも自分なりのミッションにしていたわけなんですけども、なかなか広がらなかった。しかし、コロナで多くの人々の認識は変わってきた。そして気候変動というものに対して、しっかりと取り組まなきゃいけないというふうなことから、また新たなスコープで人間の安全保障を考えるべきなのではないかという機運が出てきたと言えます。

新世代の人間の安全保障と連帯



UNDP2022年特別報告書『人新世の脅威と人間の安全保障：さらなる連帯で立ち向かうとき』より

ですから、そこで扱われている問題としては技術、特にデジタル技術ですとか、暴力的紛争や水平的な不平等の問題っていうのが人新世的な、つまり気候変動などによって、かなり新しい形態を取ってきたということ。そして、コロナに代表されるようなヘルスシステムに関わる新しい課題といったものもグローバルに見えてきた。これらの新しい脅威に対処するためには、今までの保護と能力強化という考え方は不可欠だけれども、それだけでは十分じゃないだろうと。そこで出てきたのが第三の柱としての連帯という考え方でした。

ですから、この報告書の中にこんな図があるんですけども、人新世という時代背景、またはコンテキストの下でいろんな脅威が出てくるということなんですね。その中でそういう脅威に取り組むためには、従来であれば人々を保護する、エンパワーするということがなんだけれども、これをバラバラにやってもいけないし、もっとシステミックに変化させなきゃいけない。そうすると連帯というのが重要になってくるだろうということですね。そして、そうした行動や連帯を誰がするのかと言ったら、結局はわれわれ人間なんだということで、人間の「行為主体性（エージェンシー）」としての役割に注目すべきだという議論を立てています。

新世代の人間の安全保障と連帯

Table 1.1 Evolution of the action framework for human security in the Anthropocene context

Component	Existing	Next generation
Principles	→ People-centred → Comprehensive → Context-specific → Prevention-oriented	→ People-centred → Comprehensive → Context-specific → Prevention-oriented
Agents	→ Governments and UN entities → Nongovernmental actors 政府・国際機関・NGO +	→ Governments and UN entities → Nongovernmental actors → Enhanced role for the agency of people everywhere, integrated networks of agents; networked multilateralism, greater emphasis on collective action and greater space for social norms at the local and global levels. すべての人
Targets	→ Universality → People, mainly in developing countries 主に途上国の人々	→ Universality → People everywhere through common security, for one's security depends on the security of others. → Reduce planetary pressures. → Enhance resilience of ecosystems + すべての人 + 地球・生態系
Threats	→ Widespread in communities, cross-cutting across sectors, mainly physical (excluding Responsibility to Protect situations) ローカル・コミュニティ	→ Widespread in communities, cross-cutting across sectors, both physical and mental (excluding Responsibility to Protect situations) → Anthropocene context of compounded threats → Anthropocene risks → Advanced technologies → Inequalities as an assault to dignity → Violent conflict → New health challenges + 人新世のコンテキストでグローバル
Key strategies	→ Protection-empowerment 保護と能力強化	→ Protection-empowerment-solidarity → Foster agency to strengthen the links among protection, empowerment and solidarity + 連帯

Source: Human Development Report Office, adapted from Hoshino (2021).

「保護」と「能力強化」と「連帯」をつなぐ中核概念としての「行為主体性 (agency)」
= 自身のウェルビーイングを差し置いても より大きな価値のために行動する能力

先ほど、この報告書を作るときのバックグラウンドペーパーの執筆者の 1 人が自分だったという話をしましたが、新しい時代の人間の安全保障考えるときに、何が新しいのかを考えるにあたり、私は新旧対照表の作成を提案しました。実際に報告書の中でも、私のペーパーを参考にして新旧対照表が掲載されています。人間の安全保障については、その基本的な考え方が、人間中心で包括的で文脈に沿った形で、予防も視野に入れて対応、政策をするっていうふうなことは原則、基本でもありますので変わらない。そして、今まで人間の安全保障の対象者は主に途上国の脆弱な人々とされていて、国際機関や政府や NGO がローカルのコミュニティの人々を保護する、そしてエンパワーする、それが基本的なオリジナルの人間の安全保障の考え方だったと思うんですね。

「人新世」の危機とチャンス

「人新世 (じんしんせい)」

46億年に及ぶ地球の歴史のなかで、現在は「人新世」という新しい名前の地質時代を画するほどにまで人間の活動が地球のキャパシティやエコシステムに影響を及ぼす時代になっているのではないかと、という地質学の説。

主な地質時代

現在	いつ頃から？
新世代	第四紀
	更新世
	1万1700年前
	更新世
	250万年前
	更新世
	6600万年前
中生代	白垩紀
	ジュラ紀
	三疊紀
古生代	2億5100万年前
	4億4100万年前
先カンブリア時代	46億年前

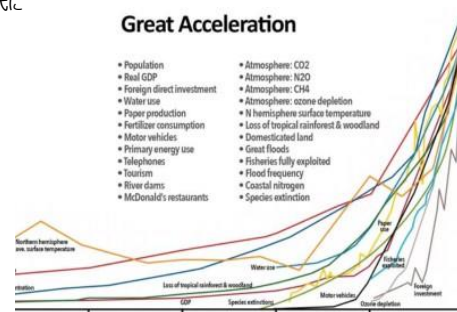
<https://studyu.jp/feature/theme/anthropocene/>

「グレートアクセラレーション」

人間活動の爆発的拡大

⇒特に1950年以降の変化 (正と負) が急激

Great Acceleration



<https://www.pinterest.jp/pin/275775177167542214/>

「終末時計」

核戦争などによる人類の終末を午前0時とし、その終末までの残り時間を「あと何秒 (分)」という形で示した時計。米国の原子力科学者会報が定期的に発表。



shutterstock.com : 5651277236

⇒「地球の限界」の危機に、地政学的・社会的な「分断」や科学技術の「暴走」は、人類の「終末時計」を進めかねない
⇒通常は自虐的に人間活動が地球に対する負の影響の側面ばかりが強調される「人新世」論だが**人間の持つ能力や可能性をより持続可能な世界に向けた「ニュー・ノーマル」実現のために活用できないか？**

「人新世」の危機とチャンス

「プラネタリー・バウンダリー」 (人類のために安全動作領域)

限界点を超えると地球は不可逆的・壊滅的に変化



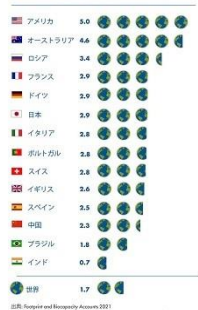
<https://www.utoopiagriculture.com/journal/440>

“我々は、貧困を終わらせることに成功する最初の世代になり得る。
同様に、**地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない。**”

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030 アジェンダ」(2015)より抜粋

「アース・オーバーシュート・デー」とは、
(人類が消費する自然資源量が1年間に地球が再生できる自然資源の量を上回る日)
人間が消費している自然資源の量は、地球1.7個分 (7月29日にオーバー)

もし世界中の人々が米国と同じように暮らしたら、
地球は何個必要になるでしょうか？



Country Overshoot Days 2021

When would Earth Overshoot Day land if the world's population lived like...



EARTH
OVERSHOOT
DAY

Source: National Footprint and Biocapacity Accounts, 2021 Edition
data.footprintnetwork.org

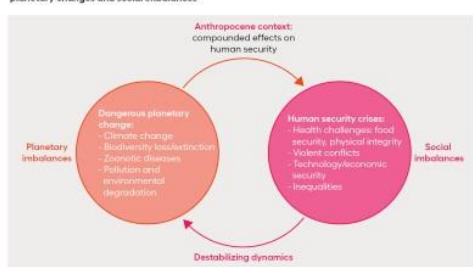


Global Footprint Network
Measuring the Human Demand on Earth's Ecosystems

しかし気候変動の時代、そしてコロナの時代、どうなってくるかという、確かに政府や国際機関、NGO も頑張らなければいけませんけども、われわれ全てがしっかりと問題の所在を認識して、行動を取ることをしていかなければならない。なぜならば、脅威の対象になっている人たちというのは、今までのように途上国の脆弱な人々だけではなくて、先進国の私たちも含めてでもありますし、さらに言うと、地球とか生態系までもが脅威にさらされる時代になってきているというわけですね。

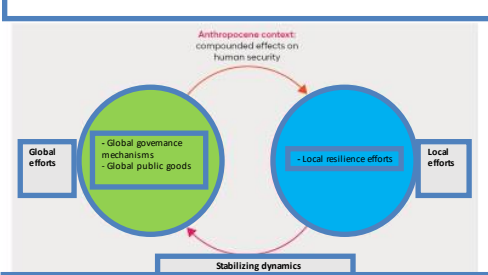
「人新世」の危機とチャンス

Figure 2.1 The Anthropocene context is reshaping human security through the interaction of dangerous planetary changes and social imbalances



Source: Human Development Report Office

Global Governance for Human Security in the Anthropocene Model



HOSHINO Toshiya's adaptation

そうすると、脅威はローカルコミュニティに存在するだけでなく、グローバルな社会全体に対して対応していかなければいけないことになるわけです。そうすると、保護と能力強化ということを現地のローカルコミュニティで人々を対象にするということに加えて、新しいグローバルなメカニズムをつくっていかなければいけないんだろう、ということ

になってくる。そこで連帯を通じたグローバルガバナンスですとか、グローバルな公共財の提供っていうのが出てくるということですね。人新世の危機というのは、このように人間の行動によって地球環境や社会に影響を及ぼしているというふうなことになるわけで、地球のバウンダリーを越えないように、そしてそれをどういうふうに直していくかっていうふうなことになるわけです。従って地球の不均衡と社会の不均衡が相互に影響し合ってしまうというふうな関係にあるわけなので、これに対応するためには、新しいグローバルガバナンスの仕組みとか公共財を提供するメカニズムが必要になってくるということになるわけですね。

新世代の人間の安全保障と連帯

人間のアイデアには世界を変えるパワーがある。

人間の安全保障のアイデアは、公共政策となり、世界の平和的变化をもたらす
(国家中心思考からの脱却)

従来の人間の安全保障の概念が受け身的（保護・能力強化の対象）

↓↓↓

新時代の人間の安全保障は、人々の能動的な連帯を通じた平和的变化

- グローバル・ガバナンス制度の発展
- グローバル公共財の提供

「人新世」の時代、カギとなるのは、私たち人間の行為主体性と実践

⇒ 連帯のための共通目標、共通の危機感、共同の行動を

(SDGs) (歴史の分水嶺との認識)

人間の安全保障という考え方はかなり世界を変えるパワーがあると考えています。これを公共政策として、世界の平和的な変化、別の言い方をすると、持続可能な社会に向けての変化につなげていくということになるわけです。そのときに大事なことは、従来の発想だと人間というのは、受け身の存在で保護される対象、能力強化をされる対象だったところから、実は問題をつくっているのもわれわれなので、私たち自身が能動的に平和的な変化をつくる主体性を発揮しなきゃいけないということを実感するというのが必要になってくるんだろうというふうに思います。

そうすると、結論は実は山本さんがさっき言ってくれたことと全く同じだなと思いました。なぜならば連帯のためには、まず共通の目標を持つことが必要になります。そうした目標はこれから探さなくても、実はSDGsという形で既に存在している。そしてやはり山本さんもおっしゃったように、危機感がないと人々は本気になりません。ですから、私たちがいま、歴史の分水嶺あるいは歴史の大きな分岐点にあるんだというふうな認識。今やらないと取り返しがつかなくなる、そういったような危機感を持つ、あるいは共有できるようにすること。そうしたなら、それを今度は自分たちの行動に結び付けるということですね。

ですから連帯も、連帯のための連帯ではなく、結果をもたらさなければいけないので、そ

ういった行動をつくるための一つの指針として、SDGs があるでしょうし、そこに反映されている人間の安全保障という考え方があり、これが今、国際社会においてももう一つ、この人間の安全保障をいまの時代や脅威に合わせてアップデートするという動きがあるということ、きょうはご紹介させていただいた次第です。ご清聴ありがとうございました。

木村 星野先生、ありがとうございました。当初は冒頭に、星野先生にこの報告書の内容をご紹介いただいて、連帯というキーワードをご提示いただいた後に、山本さんに具体例をご紹介いただくという流れを考えておりました。急きょ順番が入れ替わりましたが、山本さんの発表内容ともひも付けて、分かりやすくご説明いただきまして、ありがとうございます。この後、第2部のパネルディスカッションにも引き続きご登壇いただきますので、第2部も引き続きよろしくお願いいたします。

それでは第1部、最後の登壇者になりますが、同じく大阪大学にあります社会ソリューションイニシアティブの堂目先生から、当初の案内から題目を変更しまして、『近代を超えて：共助社会、共感資本主義、グローバル・シチズン・ネットワーク』と題しまして、ご報告いただきます。堂目先生、よろしくお願いいたします。

堂目

みんなのSDGs 2022年度第2回セミナー

近代を超えて

共助社会、共感資本主義、グローバル・シチズン・ネットワーク

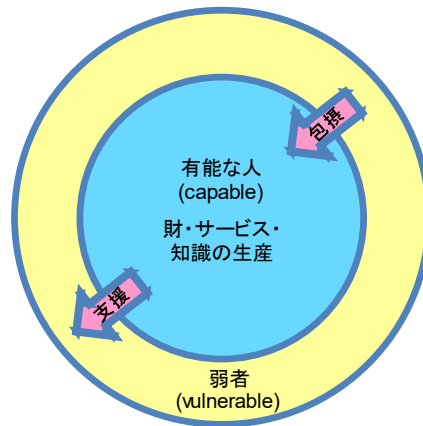
2022年10月11日

堂目卓生

大阪大学大学院経済学研究科教授
社会ソリューションイニシアティブ長
t-dome@econ.osaka-u.ac.jp

大阪大学の堂目です。よろしくお願いいたします。私は社会ソリューションイニシアティブというシンクタンクの代表を務めております。経済学研究科にも所属しております。私は、SDGs は、この 300 年、つまり近代でつくられた人間や社会に対する見方であるとか、現実の枠組みを超えていくための非常に重要なプラットフォームだと思っています。本日はそのような意識から「近代を超えて：共助社会、共感資本主義、グローバル・シチズン・ネットワーク」というテーマで報告させていただきます。

近代社会(観)の基本構造



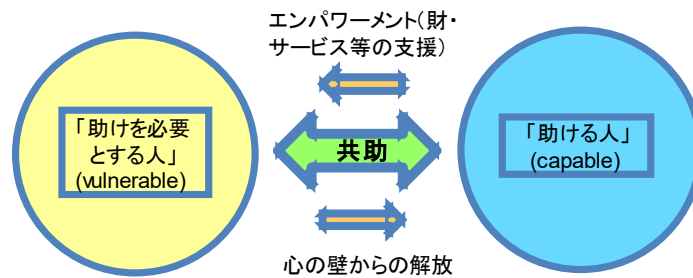
「有能な人」(capable)は「弱者」(vulnerable)に一方的に与えるだけか？

2

(スライド2) 今、近代と言いましたけれども、私が捉える近代の実際の社会の仕組み、あるいは社会観は、このような簡単に図によって示されると思います。私の専門は経済学の歴史ですが、いずれの経済学も近代の枠組みを前提としています。すなわち、社会の中心に有能な人、capable な人、つまり財・サービス、知識を生産できる人、生産に貢献する人を中心に置いて、生産に貢献できない人、つまり incapable な人や脆弱な (vulnerable) 人を周辺に置いて、財やサービスを分配していく、こういうシステムです。分配の仕方にはいろいろあって、貢献していない人には分配はしなくてよい、自己責任だと考えるのがリベタリアニズム、そうではなくて平等に分配しましょうというのが社会主義です。その他は両者の中間にあると言えます。

また、最近、包摂 (インクルージョン) という言葉が使われますが、どこに向かって包摂するのかというと、capable な人に向かってです。vulnerable な人を少しでも財・サービス・知識の生産に貢献できるような有能な存在に近づけようとしているのではないかと思います。私はこの見方や枠組みを変えるべきだと考えています。そこで問い掛けたいのは、「capable な人は vulnerable な人に一方的に与えるだけか」。「vulnerable な人は capable な人から一方的にもらうだけか」ということです。

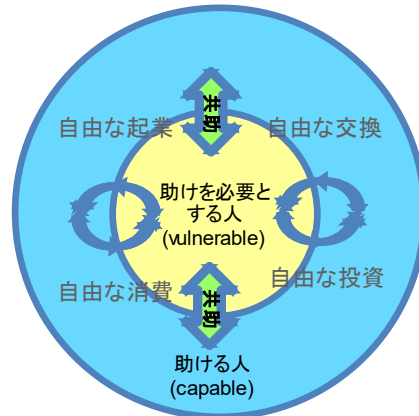
「有能な人」(capable)と「弱者」(vulnerable) の共助関係



3

(スライド3) 確かに capable な人、あるいは助ける人は、障害があったり、高齢化したり、被災をしたり、国を追われたりしたために、vulnerable な状況にある人、あるいは助けを必要とする人に財やサービスなどの支援をする、いわゆるエンパワメントをします。しかし、それだけでしょうか。一方的に与えるだけでしょうか。そうではないと思います。助けを必要とする人、苦難の中にいる人は、その状況の中で一生懸命に生きていて、むしろ、本当の意味で命に向き合っています。他方、助ける人は相対的には恵まれた環境の中にいる人ですが、心のどこかで vulnerable になることを恐れている。そうなったらどうしようと思っている。ここに「心の壁」があるのではないのでしょうか。助けを必要とする人に直接、接していく中で、苦難の中で生きていること、生きる意味、命の輝きを助ける人のほうが与えてもらうという関係があるのではないかと思います。心の壁、自分を縛り付けていたものから解放されるという恩恵を受け取るという共助関係があるのです。私は、この関係に気が付いている社会、そして、助けを必要とする人を「与えられなくてはならない存在」としてではなく、「与えてくれる存在」として中心に置く社会を目指していきたいと思います。

コロナ新時代において目指すべき社会 「助けを必要とする人」と「助ける人」との共助社会



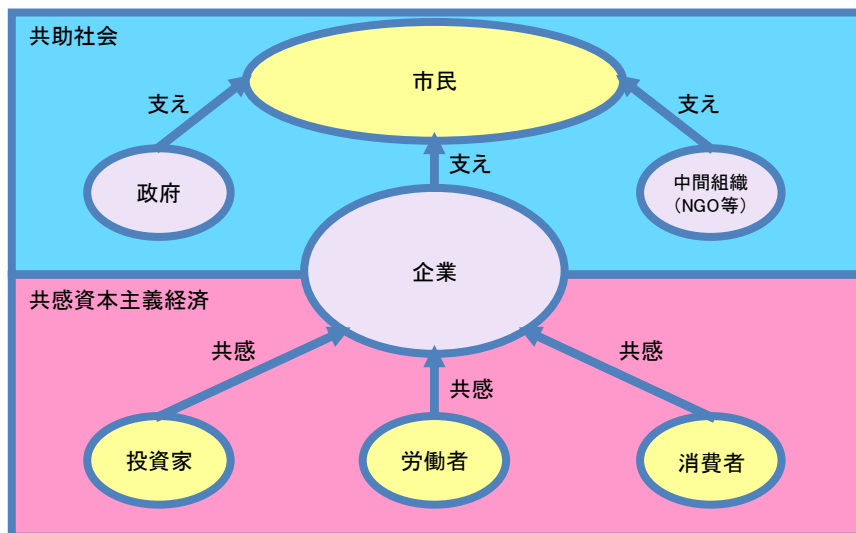
4

(スライド4) 新型コロナウイルス感染症によって、実は私たち誰もが助けを必要とする人になり得る時代にいることが分かりました。実は、普通に生活していた人を、助けを必要とする人にする可能性を持っているのは、コロナウイルス感染症だけではなくて、震災や台風、水不足、エネルギー不足、あるいは紛争など、どの社会課題も持っています。ですから、たとえコロナ禍が落ち着いたとしても、誰もが助けを必要とする人になり得る時代は続くと考えなくてはなりません。

図は、そういったコロナ新時代に私たちが目指すべき社会を示しています。それは先ほど言いましたように、助けを必要とする人、vulnerable な人を社会や意識の真ん中に置いて、助ける人、capable な人が周りから向き合っていく社会です。ただし、今、言いましたように、誰が助けを必要とする人になるのか、誰が助ける人になるのかということは、固定化されないで、流動的です。そして重要なのは、助ける人が助けを必要とする人を助けるというだけでなく、助けを必要とする人が助ける人を助けるという関係、共助の関係に社会として気付いているということです。

ここから経済の話ですけども、こうした社会の背後で、自由な起業、自由な交換、自由な消費からなる経済が維持されることが重要です。つまり個人の選択の自由、あるいは責任によって、共助社会を物質的に支えていくことが必要だと思います。

共助社会を支える共感資本主義経済

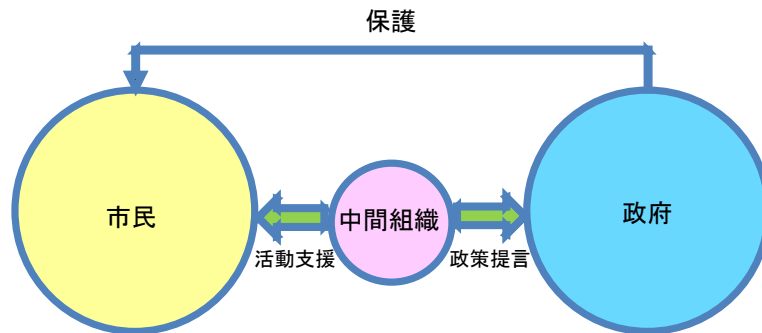


5

(スライド 5) 図の上段は共助社会です。黄色の部分がいわゆる市民で、それを政府、企業、中間組織などによって支えている。その中で特に企業は財・サービスを提供して支えるになるわけです。下段はそうした企業を投資家、労働者、消費者が共感によって支えていくことを示します。具体的には、投資家であれば、市民だけではなくて自然に対しても配慮している企業に優先的に投資していく、いわゆる ESG 投資をして企業を支えます。労働者は、市民を支える企業に自分の労働サービスを提供する。学生などによる「エシカル就活」もそのひとつです。最後に、エシカル消費です。つまり消費者が単に価格や商品の質だけではなくて、その商品がどうやって出てきたのか。届くまでのプロセスの中で下請けさんであるとか、社員さんとか住民とかにどんな影響を及ぼしてきたのか、あるいはその商品自体が市民や自然に対してどんな影響を与えるのかということを考慮に入れて、消費していくということが必要だと思います。

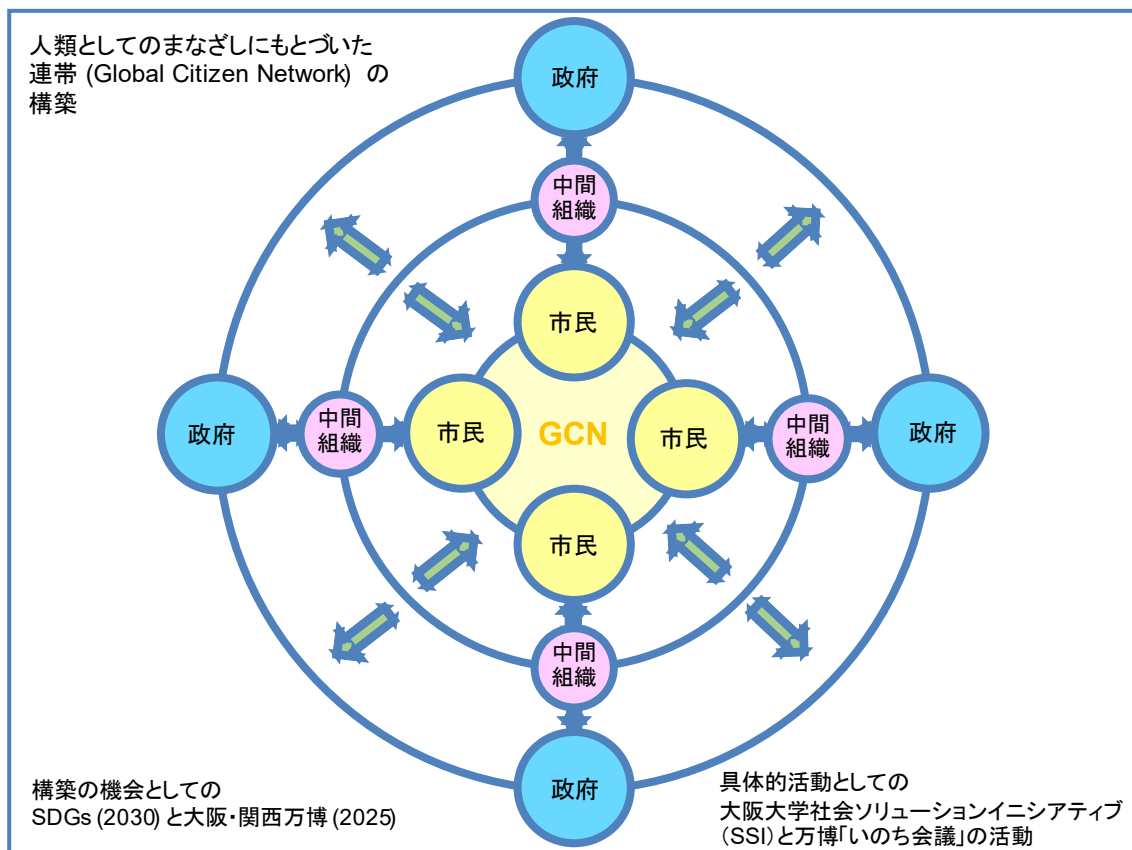
言うのは簡単ですけども、これを実現するのは難しい。まず、企業が市民をどう支えているのかが見えるようにならないといけないし、その程度が測れないといけない、そして評価されなければならない。社会ソリューションイニシアティブでは、比較可能な指標になるようなものがないかを、企業の方々にも集まっていただきながら研究しています。

共助社会を支える政府と中間組織



(スライド 6) 市民の支えとしては、企業以外にも、中間組織や政府（地方政府も含む）があります。政府はもちろん市民に対して、いわばパブリックサーバントとして法や制度、政策の形で保護を与えていきます。しかし、政府の保護は、市民のニーズ、特にマイノリティのニーズ、声を上げられない人たちの声、声なき声のニーズを細かなところまで聞けていないかもしれない。したがって、NGO などの中間組織が市民の中に入って行って支援するとともに、声なき声を聴かなくてはならない。その上で、政府に対してアドボカシー、政策提言することによってよりきめの細かい保護が提供できるよう、働き掛けなくてはならない。このように思っています。

大学もこの意味で中間組織に含まれると思います。社会ソリューションイニシアティブも、こういった役割を果たす中間組織として立ち上がりました。さらには、中間組織としての大学における研究の在り方、教育の在り方ということも今後、問われていかなければなりません。

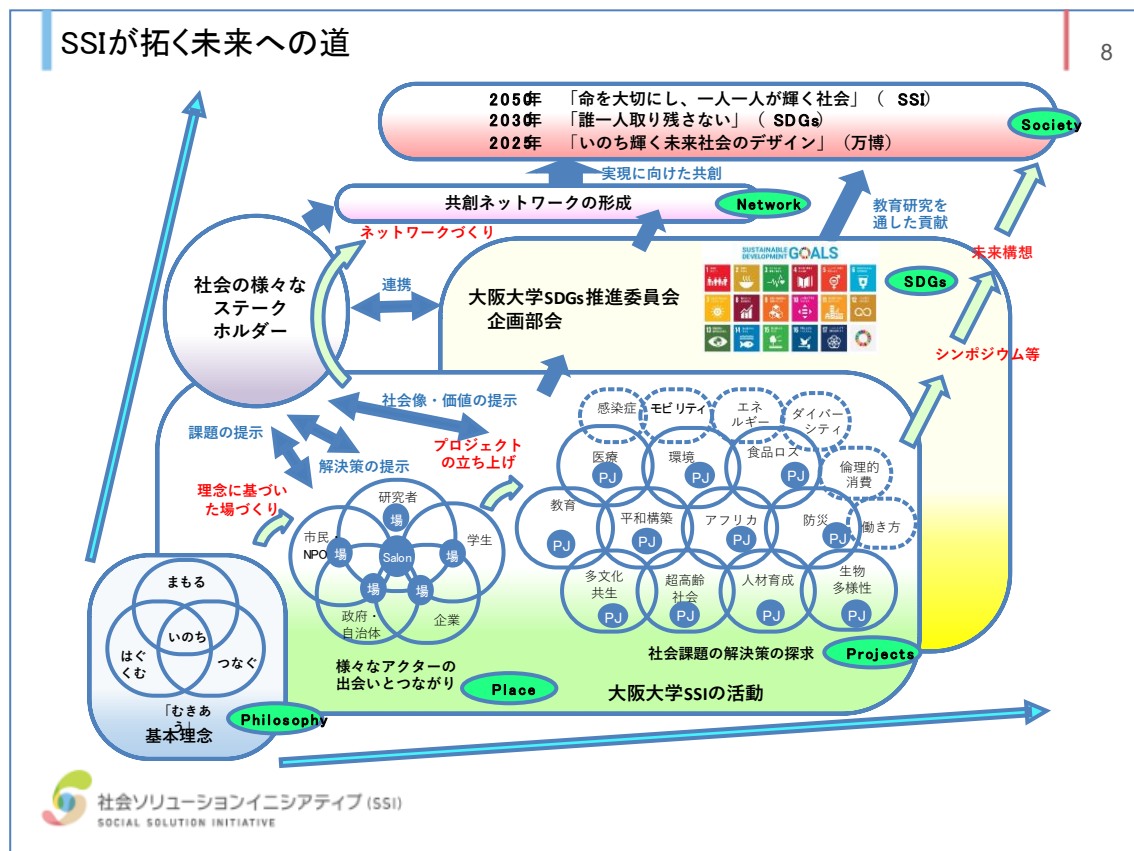


(スライド 7) グローバル化が進む中、環境問題、エネルギー問題などの複合的な危機が国境越えて迫っています。それを踏まえて、市民、中間組織、政府というのも国境を越えて連帯していかなくてはなりません。図は世界の中心に市民、特に助けを必要とする人びとを置いて、その周りに、NGO や大学などの中間組織、さらにその外側に政府が国境を越えて連帯することを示しています。互いに助け合うグローバルな市民の連帯というものが構築できるように、中間組織も連帯していかないとはいけません。あるいは政府も連帯していなければならない。私はこの全体を「グローバル・シチズン・ネットワーク」と呼んでいます。

先ほど星野先生が紹介されました国連開発計画の『人新世の脅威と人間の安全保障』の中で、「人類としてのまなざし (the eyes of humankind)」が人間の安全保障を追求するための必要条件だとされていますが、グローバル・シチズン・ネットワークこそ、必要条件の一つではないかと思います。さらには、グローバル・シチズン・ネットワークの真ん中に、人間以外の命、助けを必要とする命、すなわち自然というものも入れることができるのではないか、そうなるとこのネットワークは人間だけではなくて、全ての命の安全を保障するための連帯と呼べるものになるのではないかと思います。

私は「誰一人取り残さない」をうたう 2030 年の SDGs や「いのち輝く未来社会」をテーマとして掲げる 2025 年の大阪・関西万博は、こういったグローバルなネットワークを構築するための機会だと捉えています。SDGs を達成するために、あるいは万博を意義あるものにするために、そして beyond SDGs を考えるために、ネットワークを構築する。あるいはネッ

トワークを構築するために、それらの機会を使っていく、このような見方もできるのではないかと思います。



(スライド8) 大阪大学の社会ソリューションイニシアティブは、このような理念や目標を持って SDGs と万博を捉え、さまざまな活動を展開しています。残りの時間、簡単に紹介したいと思います。

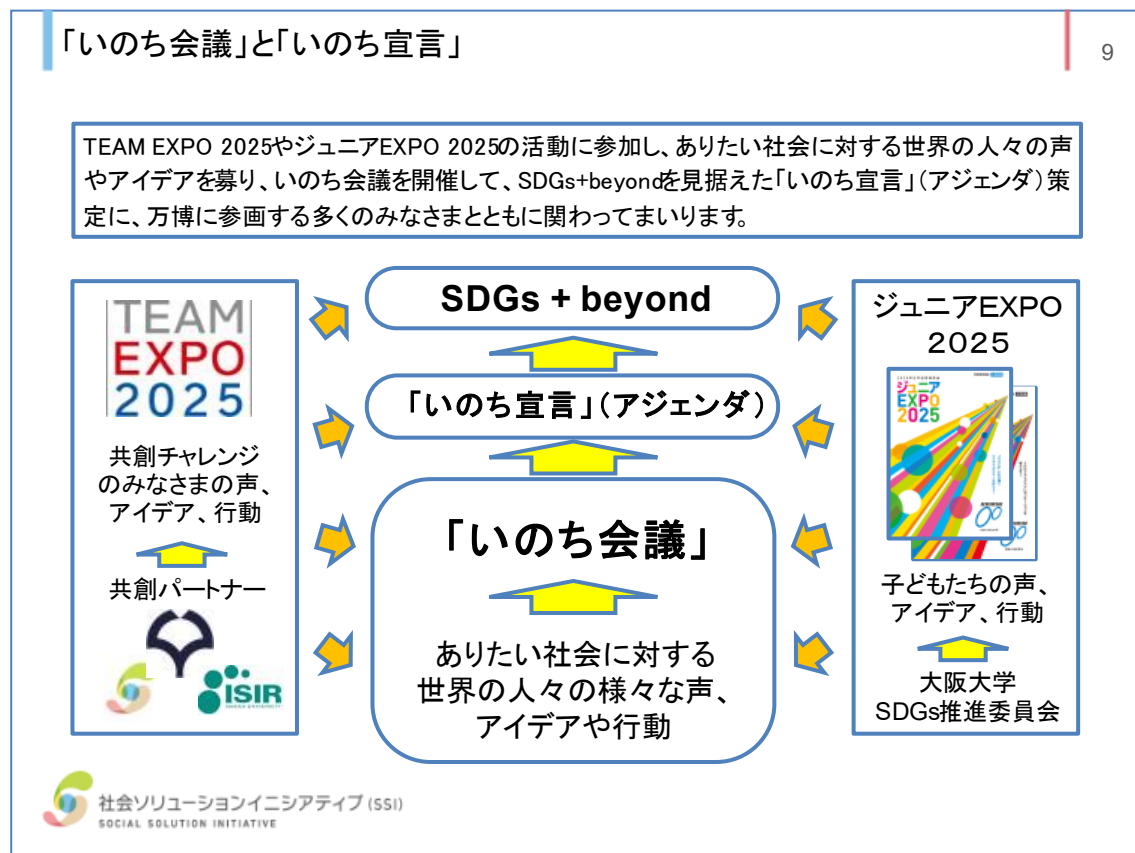
SSI のキーワードは「命」です。命に向き合うということを基本にし、「まもる」、「はぐくむ」、「つなぐ」という視点から、社会課題に取り組むこと、これが根本的な理念です。それを踏まえて、次に場づくりをします。さまざまなステークホルダーが集う「サロン」というものを中心に、研究者、学生、企業、あるいは地方自治体、市民やNPO という個別の場もつくっております。そして、次のステップとして、より具体的なテーマが見つかった場合には、プロジェクトを立ち上げていきます。これまで12のプロジェクトを立ち上げてきました。最近では、SDGs にも取り組んでおります。

重要なのは、こういった一つ一つを首尾よく進めていく、社会実装させていくことですが、それ以上に、社会のさまざまなステークホルダーと課題解決策、社会像、価値というものを相互に提示していくことが大切です。そして、そのプロセスの中で、「共創ネットワーク」を構築します。それは先ほどのグローバル・シチズン・ネットワークにつながるものです。

「共創ネットワーク」は様々な場、あるいはプロジェクトに参加した企業、自治体、NGO、そして個人とかかからなっています。常に連絡を取り合ってるわけではなく、関係はオンになっ

たりオフになったりしますが、何かのときには相談できる、情報提供していただける、手伝いに来てくれる、そのかわりにこちらも情報提供や支援をするという関係です。この4年間で約100の団体や個人とネットワークをつくることができました。今後、数年かけて、これを1000にしていきたいと考えています。

こうしたネットワークが今から30年先の社会、「命を大切にし、一人一人が輝く社会」がどんな社会なのか、具体的にどうすればいいのかっていうことを決めていく。そして、その手前にある2030年のSDGs、「誰一人取り残さない」をどうやって達成していくのか、さらにその手前の2025年の万博、「いのち輝く未来社会のデザイン」も、こうしたネットワークを使って乗り越えていきたいと考えています。



(スライド9) 特に万博については、SSIとして、あるいは大阪大学として取り組みたいことのひとつに、「いのち会議」があります。この会議は、大阪大学が中心になって、関西、あるいは日本、さらには世界のさまざまな人や組織に参加していただいて、SDGsの達成だけでなくSDGsの後どんなゴールを目指したらよいのかを、おとなだけではなく、若い世代、高校生、あるいは子どもたちも入ってもらって話し合い、「いのち宣言」というアジェンダの形にし、万博のソフトレガシーにしようというものです。SSIは、ジュニアEXPO 2025でも、小学生、中学生用の『万博読本』の監修に関わらせていただきました。『万博読本』は、万博やSDGsや万博の意味を「いのちの輝き」という視点から考えてもらうテキストで、実際にいくつかの学校の総合学習の中で使われ始めています。「いのち会議」では、

ジュニア EXPO を通じて得られるこどもたちの声も聴きながら、SDGs に関わるさまざまな取り組みを行っている人たちに集まっていただこうと思います。以上です。

木村 堂目先生、ありがとうございます。先のお二人の発表内容ともひも付けていただきつつ、ご所属先の活動をご紹介いただきましたし、関東圏ではまだ知名度が高まっていない大阪・関西万博と SDGs の関係についても分かりやすくご紹介いただきまして、ありがとうございました。

.....第 2 部.....

木村 それでは、ここから第 2 部に移りまして、登壇いただいた星野先生、堂目先生のお二人にも加わっていただく形で、パネルディスカッションに移っていければと思います。モデレーターの佐藤さんにお渡しする前に、まずこれまでの『みんなの SDGs』のオンラインセミナーなどを振り返る意味も含めて、『みんなの SDGs』の事務局長の藤田さんから冒頭お話しいただいた後に、パネルディスカッションに入れればと思います。藤田さん、よろしくお願ひいたします。

藤田 ありがとうございます。今回のセミナーは『beyond SDGs の議論の端緒』として、2015 年当時と比べると非常に大きな変化が起きているという状況を再認識して、複合的な危機と脅威というようなものに、どのように対応していくのかを見据えて、より大きな連帯のヒントを探そうという趣旨で開催しました。その一方で、10 月 24 日に SDGs に関するパートナーシップ会議が開かれます。そちらのほうに対して提言をすることを考えています。そのために、これまで私たち、『みんなの SDGs』が取り組んできたことを簡単に振り返ってみたいと思います。

もともと、『みんなの SDGs』としては、あらゆる分野の、国内、国外含めて非常に広い分野のことを扱ってきたのですが、コロナを契機として、コロナと SDGs シリーズを始めました。とりわけ取り残されない、あるいは取り残さないということにフォーカスをして、外国人であるとか、困窮、障害、LGBT、いろんな課題を学んできました。

みんなのSDGs:「COVID-19とSDGs」シリーズ

開催日	テーマ	登壇者・演題
2020.7.30	それどころじゃない！ vs いまだからこそ！	北郷美由紀氏（朝日新聞）「コロナ禍で、SDGsの関心は薄れているのか？」、 五石敬路氏（大阪市立大学）「コロナ下のSDGsと地方自治体」 西原智昭氏（星槎大学）「マルチ視点の必要な森林保全と感染症」 和田征樹氏（ASSC）「現代奴隷法対応のトレンドとCOVID-19影響下での対応」
2020.8.27	在日外国人を取り残さないために （生活編）	ド・ヴァン・トゥアン氏（在仙台ベトナム人協会）「外国人コミュニティの視点」 ジギャン・クマル・タパ氏（かながわ国際交流財団）「外国人コミュニティの視点」 新居みどり氏（CINGA）「包括的電話相談の視点～外国人と日本社会の橋渡し」 鳥井一平氏（移住連・全統一労組）「労働・法的支援の視点:現場課題を地球規模の視野で考える」
2020.10.7	在日外国人を取り残さないために （保健医療アクセス編）	大川昭博氏（外国人医療生活ネットワーク）「在留資格と保健医療へのアクセス」 新居みどり氏（CINGA）「外国人相談と保健医療へのアクセス」 沢田貴志氏（港町診療所/SHARE）「保健医療へのアクセスが困難な事例から見えてくるもの」
2020.12.4	障がい課題を取り残さないために	井上 一氏（星槎グループ）「障がいを持つ児の教育分野での現状と取り組み」 松井亮輔氏（日本障害者リハ協会）「障がいを持つ人の生活と雇用を守る」 秋山愛子氏（UN-ESCAP）「不平等な障がい権利条約と政策への取り組み」

今見ていただいているのが 2020 年度に開いた 4 回のセミナーになります。最初コロナを迎えて、「SDGs どころじゃないんじゃないか」、あるいは「今だからこそ SDGs なんじゃないか」という視点で最初のセミナーを開きました。地方自治体の視点であるとか、環境保全、感染症、あるいはサプライチェーン、現代奴隷法とさまざまな視点から議論をしました。その上で外国人の課題にフォーカスを、それから障害課題にフォーカスをしたというようなことがあります。

みんなのSDGs:「COVID-19とSDGs」シリーズ

開催日	テーマ	登壇者・演題
2021.6.4	希望するすべての人にワクチンを：誰一人とり残さないSDGs実現のために（外国人編）	酒井康之氏（ITCO）「技能実習生に新型コロナワクチン接種を拡大する上での課題と展望」 劔陽子氏（熊本県菊池保健所）「保健からみた新型コロナワクチンと外国人」 高山義浩氏（沖縄県立中部病院）「医療からみた予防接種と外国人」 森田直美氏（全国医療通訳者協会）「国際交流協会や医療通訳が保健所・医療機関をどのように支援できるか」
2021.7.30	希望するすべての人にワクチンを：誰一人とり残さないSDGs実現のために（日本人編）	大石亜美氏（厚生労働省）「ホームレスの人々への新型コロナウイルス感染症のワクチン接種」 武石晶子氏（世界の医療団）「豊島区におけるグッドプラクティスとホームレス状態の人々へのアンケート調査」 油井和徳氏（山友会）「山谷における実態と支援活動（大阪あいりん地区の報告も含む）」
2022.1.31	取り残されやすい人々へのCOVID-19影響：各種実地調査から見える実態	神田未和氏（NCGM）「日本の相対的貧困者におけるCOVID-19影響のオンライン調査」 生島嗣氏（ぶれいす東京）「GBTコミュニティにおけるCOVID-19影響：当事者の語りの収集」 稲場雅紀氏（アフリカ日本協議会）「COVID-19下の日本における脆弱性を抱える人々の保健・医療アクセスに関する質的調査」 岩本あづさ氏（みんなの外国人ネットワーク）「日本における外国人の保健医療アクセスの課題：COVID-19ワクチン接種と感染者対応を中心に」 北郷美由紀氏（朝日新聞）「貧困・LGBT・外国人の課題をSDGsという形でまとめて打ち出すには」 川合千那未氏（DPI女性障害者ネットワーク）指定発言「障害者の立場からSDGs」
2022.5.23	SDGsは役立つのか？：障がい者、LGBT、外国人の視点から	稲場雅紀氏（アフリカ日本協議会、SDGs円卓会議メンバー）「2015年以来SDGsは何にどう役立ってきたのか、何にはまだ役立っていないのか」 当事者・支援者の視点「SDGsはどれくらい役立っているかどうすればもっと役立ちそうか」 石橋大吾氏（全日本ろうあ連盟）「障害者の視点から」 村木真紀氏（虹色ダイバーシティ）「LGBTなど性的マイノリティとSDGsについて」 田中雅子氏（上智大学）「SDGsとGCMを手がかりに考える技能実習生の孤立出産をめぐる事件」

2021 年に入りまして、ワクチンのことが大きな課題になってきたところで、外国人のワクチンの課題が非常に大きいということ。それとオーバーラップする形で、日本の中での困窮者、特にホームレスの方とか、居住の困難を抱えていらっしゃる方の課題が、かなり共通するんじゃないかという問題意識でセミナーを行いました。それから後半、取り残されやす

い人々に関するさまざまな調査を全体として見てきて、SDGs が貧困だとか LGBT、外国人、その他障害を含めて、いろいろな課題を束ねる力、まとめて打ち出す力というものを持っているんだろうかという、問題意識を持ちました。あるとすれば、それはどのようにつくっていいのかなという問題意識で取り組みました。その上で今年の5月には、それぞれの課題に関わってらっしゃる方、あるいは当事者の方からお話を伺おうと。SDGs って一体役に立つのでしょうか。役に立つとすれば、どのように役に立つのでしょうか。課題の種類を超えて連帯していける可能性ってあるのでしょうかということをテーマにしてセミナー行いました。

日本の自発的国家レビュー(VNR)

開催日	テーマ	登壇者・演題
2021.2.22	だれ一人取り残さないSDGs 進捗評価：日本VNRに向けて	稲場雅紀氏 (SDGs 推進円卓会議) 「日本政府による SDGs 達成に向けた進捗管理・モニタリングの検討状況について」 勝又幸子氏 (ヒューネットアカデミー) 「日本政府の VNR から取り残されがちな課題について (障害などの観点から)」 松中権氏 (グッド・エイジング・エールズ) 「当事者・市民が課題を前に進めた事例: LGBT の人権の取り組みと評価・指標の活用」
2021.10.27	このままでいいの？SDGs: 日本VNRから見えること	SDGs推進の枠組みとVNRの位置付けの紹介 (SDGsジャパン新田恵理子氏) VNR2021の概要と作成プロセス ①日本のVNR2021ビデオ ②プロセスの説明とコメント (SDGsジャパン三輪敦子氏) ③ビデオレター (慶応大学蟹江憲史氏) VNR2021の内容の振り返りと今後について ①環境の視点 (国立環境研究所春日文子氏) ②ユースの視点 (JYPS倉石東那氏、尾迫志央理氏) ③保健医療 (アフリカ日本協議会稲場雅紀氏) ④メディア (朝日新聞北郷美由紀氏) ⑤国連広報 (国連広報センター根本かおる氏)

それに加えて、日本の自発的国家レビューに関しても見てきたということになります。振り返ってみますと、それぞれの固有の課題に関しての理解を深めましょうと、それを共有しましょうということが一つ。もう一つは課題の種類を超えて、それぞれに通底する課題、共通のものは何か、つながりとかシナジーみたいなものは生み出せるのか、SDGs の束ねる力でどんなことができるのか、ということを探索してきたということだと思います。そのようなことを踏まえて、今後、共通の目標あるいは連帯の方法みたいなものを具体的に考えたいと思っています。

さらに、外国人であるとか LGBT であるとか、明らかな属性でまとまって考えるということが出来る場合もあれば、そうではなくて、いわゆる社会の中でたくさんの人たちが孤立をしている。明らかな共通の属性があるわけではないけど、みんなが困っているばらばらな状況にあるというようなことも、何とか視野に入れていかなければならないんじゃないかと。そのようなことで、第2部のディスカッションのイントロとして、これまでの『みんなのSDGs』、特にここ2年半の取り組みに関して、ご紹介をさせていただきました。以上です。

木村 藤田さん、どうもありがとうございます。ではここからは、第2部のモデレーターを

お願いしております、国際開発学会の佐藤さんにマイクをお渡ししたいと思います。佐藤さん、よろしくお願いいたします。

佐藤 登壇者の皆さま、ありがとうございました。時間が30分ぐらいあると思いますけども、少しディスカッションしたいと思います。今、藤田さん含めて4人の方からお話をいただいたんですけども、いくつか共通点があったかなと思います。その一つは連帯というキーワード。そこでまずSDGsと連帯の関係について、少し考えてみたいと思うんですね。最初に、山本さんが非ステークホルダーの巻き込み、連帯っていうのをおっしゃっていて、それ以外にも関係する人たちの連帯、つまり同じ目標に向かっている人たちの連帯っていうのも重要だと思います。

それと、人新世の認識とSDGsの基礎となる認識の親和性が高いということは、みんな認めてると思うんですけども、人間の安全保障という概念と連帯って、どういう関係にあるのかとか。先ほど星野さんのお話にあったように、保護とエンパワーメントに加えて、三つ目に連帯が出てくるって非常に面白いと思ったんですけども。助けを必要とする人、取り残されやすい人々がフォーカスされるって、つまり『誰一人取り残さない』というSDGsと親和性高いわけですが。

最後に藤田さんが問いかけたように、SDGsは役に立つのか。あるいは束ねる力があるのか、連帯に寄与するのかっていうこともあると思います。まず、登壇者の皆さんがきょう一通りお話を聞いた上で、SDGsと連帯の関係について何か発見があったかというところをまず順番に話していただきたいと思うんですが、星野さんからよろしいでしょうか。

星野 今の質問、とても重要だと思いますし、私のきょうのプレゼンの最後は、連帯をどうすれば実現できるかということに持っていったわけですが、その最初にSDGsの存在を指摘したわけなのですね。それは共通の目標の例としてなんです。つまり連帯も、やみくもに連帯しようねと言っても、何のためっていうのがないと連帯のしようがないと。しかし、SDGsというものが既にあるので、それに向かってということで方向性が確実にあるわけです。その中でももちろんいろいろなバリエーションあるかもしれないけれど、大きな方向性を指しているわけですので、ここが一番のポイントになるんじゃないかなというふうに思っています。いかがでしょうか。

佐藤 ありがとうございます。これまでの『みんなのSDGs』の議論の中でも、SDGsの接着剤としての役割とか、共通言語としてのSDGsって言われ方をするんですけど、今、星野さんおっしゃったとおり、目標が共通であるってことによって、まず舞台設定ができる。それがあるというのはとても重要なポイントだと私も思います。

星野 それについては一つだけ、元外交官として加えさせていただきますと、SDGsはどこ

でつくられた、ということなのですが、国連総会で、サミット、すなわち首脳レベルで、しかもコンセンサス（全会一致）でつくられたことが重要です。これは、全ての加盟国が最も高いレベルで合意したんだということを理解しておくことは大事です。もっとも、そういうところが実はあまり光が当てられてなくて、どこかから SDGs が自然に降ってきたみたいな受け止め方があるんですけども、その点は国連外交を専門としている立場からすると、国連が果たせる役割としては、最近、ロシア・ウクライナ戦争もあって非常に大きなチャレンジを受けている試練の中の国連ですけども、合意に基づく国際社会の共通目標の設定という面ではかなり重要な役割を果たすことができるのだと思っています。

佐藤 私もそのとおりだと思います。SDGs がどこから降ってきたか、自分たちの国の政府の代表も合意したってところが一つ、非常に重要なポイントですよね。

星野 おっしゃるとおりです。

佐藤 では同じ質問で、SDGs と連帯の関係について、堂目さん、いかがでしょうか。

堂目 SSI は SDGs を進めるために立ち上げた組織ではありません。命を大切にする社会を実現するために、そしてその中で特に人文学、社会科学がどのように貢献できるかを考えるためにつくった組織です。危機の中にある世界に対して、学術が立ち向かっていかないと、学術自体の存在意義が問われるのではないかと、こうした現実世界と学術にたいする危機意識の中で生まれたのです。

SSI を立ち上げた時にはすでに SDGs がありましたが、当時はそれほど意識していませんでした。SDGs があってもなくても、世界の危機を感じ取って、あるいは学術の危機を感じ取って、やむにやまれず動く人たちと連帯していこう、その後で SDGs にどう関わっていくのかを考えよう、という姿勢でした。

エージェンシーの視点から見れば、国連が決めたからやるというのではなくて、自分たちが今の世界の状況をどう判断するのか、あるいはそれに関連する自分たちの存在をどう見るかが大事なのだと思います。そして同様の意識をもって同様の見方をする者どうしの間に真の連帯があると思います。

もちろん SDGs は人類全体の約束事であり、世界共通のプラットフォームだと言えます。私が一番気に入っているのは、「誰一人取り残さない」をうたっていることです。それは SSI が掲げる「命を大切にし、ひとりひとりが輝く社会」に通じるものです。このことから、SSI は SDGs に積極的に取り組むことにしました。私は、大阪大学において SDGs を推進するための企画を担当しています。

SDGs を使うと、いろいろなつながりが広がっていきます。それぞれいろいろな捉え方をしているかもしれませんが、一緒に話ができる。そのきっかけになるので、SDGs を掲げな

がら、一緒にやりませんかというような形で連帯をつくってきました。

SDGs の次にはどうするのかということも考えています。次は国連主導ではなく、自分たち（市民）主導でつくってしまってもよいのではないかと。それくらいの強い連帯というか、前に進む意志の強さが必要なのではないかと思います。先ほど紹介した「いのち会議・いのち宣言」もそうした連帯によって取り組むつもりです。

佐藤 ありがとうございます。連帯と共感の関係については、次また後で聞きたいと思いますが、取りあえずここまでにして。藤田さん、SDGs と連帯の関係について、いかがでしょう？

藤田 今回セミナーを準備するにあたって、先ほどお話ししたように、2年半の私たちの活動、振り返って、あらためて見えてきたことは、SDGs に関する世の中の関心は随分高まったし、認知度も高まっているんだけど、一方でSDGs 疲れというか、聞き飽きたみたいな感じが出てきている。具体的にどういうふうに何をどうしていったらいいのか。どうしたら今までの縦割りのことであるとか、ばらばらのものをつなげていけるのかということ、実際にどう進めるかがなかなか見えてこない。そういうことに対して、特に深刻な課題を抱えてる人たちほど、もういいやというようなことを感じてらっしゃるなということを思い出しました。

そういう中で今ウクライナもミャンマーも大変なことになってる。地球、気候に関する関心も高まっている。この危機感というのは一つのキーワードなんじゃないか。脅威とか危機感というもので、あらためてSDGsのことを聞いたことがありますというレベルから、実際のわたしが危機感に基づいて、具体的につながり直す。今まで当たり前だと思っていたことじゃないやり方を考える、試すというようなことをですね。ここここがこうつながれば、こういけるんじゃないかっていうことを具体的に考え、つくっていくというフェーズに入ってきている。そこを今やっていかないといけないというところに来ているんじゃないかなというふうに、あらためて感じました。

佐藤 今、藤田さんがおっしゃった、一番 vulnerable な人、深刻な課題を抱えている人が、もういいやって思ってるっていうところ、もう少し話していただけますか。

藤田 例えば、それぞれで当事者のかたがたに登壇いただいてお話を伺ったりしてきたのですけれども、それぞれの固有の課題というのがあるわけですね。例えば障害の権利条約のことであるとか、LGBT にとってのパートナーシップ条例のことだとか法改正のことだとか、中心課題というものがそれぞれのかたがたにある。

その中心課題のところ、限られたリソースと時間とエネルギーでやったとき、そこを何とかしたいと。そのことにつながらないもの、つながると思えないものに関しては、なかなか

時間、エネルギーを割けないという現実がある。横につながって、一緒にシナジーを探すためには、時間とエネルギーが必要なんですよね。出会いも必要だし。そういう余白みたいなものをみんなが持てるような形でやっていかないと、それぞれの課題が深刻であればあるほど、横の連帯が難しくなるというコントラディクションというか、難しいパラドックスみたいなものがあるなということを、この間、学んできて。そこを乗り越えていく在り方というのは何なんだろうか。

それは余白を持つということであったり、今までと違った発想をしてみる。あるいは危機というものを一緒に考え、この危機はみんなに共通の危機ですよねというようなことを一緒に考えることによって、今まで見てきた、それぞれの固有の課題が違って見えてくることが起こってくるとするならば、新しい連帯をするエネルギーと時間とをお互い割いてやりましょうということになるのかなと。そんなイメージですが。

佐藤 なるほど。ありがとうございます。今、藤田さんがおっしゃってくれたように、これまで「みんなの SDGs」としてセミナーをやってきたなかで、マイノリティといわれる人たち、vulnerable な人たちが、自分たちの中で固まってしまうがちで、横の連帯ってなかなかないってことを発見したわけなんです。

では次の質問なんですけども、連帯を促すものは一体何なんだろうか。最初、山本さんは危機感が大事だっていうふうにおっしゃってました。堂目さんは共感とおっしゃってましたし。さっきの藤田さんの話の中、自分たちが割けるエネルギーは限られていることが、連帯を阻止することもあるし、促すこともあると思うんです。SDGs に向けて、連帯を促すものは一体何なのかということについて、皆さんのご意見を伺いたいんですが、まず星野さん、いかがでしょうか。

星野 危機感を指摘した者の 1 人として、ある程度これは重要なものだと思うんですよね。だから、共感の中にも危機感の共有という側面があってしかるべしと思うんですね。

ただ、やみくもに世界が崩壊するなどと恐怖や不安を振りまくってということではありません。ですが今、何かしておかないと、本当に世界はこれから大変なんだという切迫感に関しては、リマインドしないと多くの人はなかなか実感を持ってないんですね。例えば、コロナ禍でこれだけ苦労したにもかかわらず、ある程度ピークを越えてしまうと、また元に戻ろうとする反動があります。そして、気候変動が世界にとって最も重要な危機だという認識、脱炭素社会の実現に向けてのコンセンサスがようやく出てきたかと思ったら、ロシアのウクライナ侵攻によって、石油、石炭に舞い戻るという状況です。どれほど私たちが深刻な課題を抱えてるのかということに関しての認識と、それに対して行動するのは今なのだっていう認識は、私たちが連帯して行動するときの接着剤の一つとしては持っておかなければいけないと思うんです。

けども、それだけでは人は動かないと思うんです。先ほどの藤田さんのお話は、多く

のステークホルダーの皆さんとの心のこもった本当の対話をしているからこそ出てきた実感というものがありません。諦めの気持ちだとか絶望感とか失望感があると物事が進みません。だから、逆なんです。明日はどうか良くなるんだという希望をどこかで維持できるようにすることが実はすごく必要なんじゃないかと考えています。

最後にもう一つだけ申し上げたいのですが、連帯というのは、誰しもの同じ行動をとることばかりではなく、個々がバラバラな行動を取っていたとしても実は同じ方向にいて、どこかの段階でクリティカルマス（臨界点）を超えることにつながるという現象が一番重要なのだと思ってるんです。

人がなんで失望するかといえば、それは息切れをするからなんですね。結果が見える前に息切れしてしまうわけですがけれども、いつの間にかガラケーがスマホに代わってしまったように、臨界点というかクリティカルマスを超えると一気に変わるんですよ。そうした臨界点まで持っていくためには、とにかく小さいことでも大きいことでも、多くの人たちが同じ方向でどんどんやってくっていくのが必要になります。ですから連帯は、同じことを全員がやるということばかりでなくて、たとえバラバラな行動であっても、とにかく問題意識を同じくすることによってクリティカルマスを超えるという大きな絵を描けるようになることが一番いい。そして、その先に希望がある、と私は認識してます。

佐藤 堂目さん、いかがでしょう？

堂目 連帯といったときに、一体誰と誰の連帯なのか。個人と個人、組織と組織、vulnerableな人とcapableな人、vulnerable同士、NPO、NGO同士など、いろいろな形があると思います。これらすべてを包み込むような連帯を目指すべきだと思います。そのためには先ほど示したような、場づくりが必要です。できるだけ、各人が、そうでなければ出会わなかった人や組織と出会っていくことが必要です。SSIは、このことを意識して場をつくってきました。

異なる人との出会いを通して得られるのは、やはり「気づき」です。いろんな気づきがあると思います。一生懸命やってきたけど息切れしそうになっている人。頑張っているけど、間違った方向に進んでいるかもしれないと思い始めている人。そんな人たちが、他の人と出会うことによって、励まされたり、思い直したりする。そういう気づきの仕方があるのではないのでしょうか。あるいは、これで間違いないと思いこんでいたのが、それでは解決できないということを他の研究者や当事者から知って、考えを改めることもあるかもしれません。それぞれがどうしても閉じていく傾向がある中で、新たな気づきをもたらしてくれる出会いが必要だと思います。そのような場であれば、また来ようとか、また話そうとかいう気持ちになり、その結果、自然な連帯ができるのではないかと思います。

佐藤 藤田さん、いかがでしょう？

藤田 私、先ほど星野さんが希望という言葉をおっしゃいましたが、私はそれに近いかなという感じがあって。希望、私自身はいろいろな困難な状況にある人々や課題を見てきたときに、何とかこれをブレイクスルーする共通のものは何かないのか、通底するものはないのかと探してきたところがあります。

そういう中で私自身が発見したのは、社会的連帯経済で、既にある、何十年もされているものに希望があると思っています。それは何かというと、例えば南ヨーロッパの、バルセロナであるとかイタリア、フランス、それから中南米、アジアではソウルで行われてきた社会的連帯経済の取り組みというのは、まさに課題とか 이슈の種類を超えて、全体として何を目指して動いていったらいいのかっていうことに関する実例なんですよ。その実例があるというところに希望があるんじゃないか。

それはどういう実例かというと、社会的包摂、生きづらさを抱えてるさまざまな人たちを全体として社会的包摂できるような社会をつくっているということだけではなくて、それに加えて、エネルギーや環境の問題、食、農業のこと。それから公平で安心安全な経済、そういうものを全体として、町ぐるみでつくっていくというムーブメントが実際にあるというところに大きな希望があるというふうに思ったわけです。

それを、個別の事例はみんな違うんだけど、協力、共助、連帯、民主的運営みたいなものは理念として共通してるよねということ確認し、実際の方法論として、共同労働であるとか、地域通貨、時間銀行、公共調達の在り方を変えていくというようなことを具体的にどんどん進めていって。世界の認識として、市場経済があまりにも行き過ぎていて、いろいろなものが破壊されてきている。あるいは自分たちが破壊しているという認識もしっかりと持って、市場経済、公共経済に加えて、第三極としての社会的連帯経済。既にあるものをどんどん広げて、国を超えて、町を超えてつながって行って、新しい経済の在り方をつくっていかうということが、世界規模で今、動き始めてるという実例を知ったときに、これはまさに希望じゃないかと。

個別の事例は全部、違うんだけど、移民、難民をきっかけにして発展してきた町もあれば、貧困問題に対して取り組むことによって共同労働が膨らんでいった所もあれば、いろいろなフリクションがあってできた所もあれば、それぞれ歴史があって、みんな違うんだが、社会的連帯経済というところで、一つの共通のプラットフォームでもう一回、お互いを見直したときに、そこには多くの学びがあって、一緒に希望がある。共通の目標がある、共通の理念があると気付いたところに、すごく大きな可能性がある。

それに注目して、国連でも何年もかけて検討してきて、ILO が今年の 6 月に世界の総会で議題として挙げて、定義をつくったという流れになってるということでは、私は、SDGs、横の連帯を促す一つのドライビングフォースとして、社会的連帯経済というものに希望があると思っています。

佐藤 そうすると SDGs を促進していくためのものとして、社会連帯経済の流れが活用でき

るってことですかね。

藤田 そうですね。その逆方向もちろんあるんだと思うんです。SDGs を通して社会的連帯経済がつくられていくということもあると思います。

佐藤 ここは経済学者の堂目さんに聞きたいんですけども、今、藤田さんは、市場経済、公共経済に加えて、第三の経済としての社会連帯経済っていう見立てをしたわけですが、この辺りはどういうふうに思われますか。

堂目 私も社会連帯経済の可能性はあると思います。市場経済がグローバル化によって不安定性と格差をもたらしているのは事実です。また、公共経済においても、本当に必要な財とサービスが必要な人の所にとどめているのかという問題があります。したがって、それらとは異なる別の道を探すのは価値のあることだと思います。

他方で、今のところ、財・サービスのほとんどは、市場を通じて供給されているという現実があります。それを放置したままだと、社会的連帯経済を芽生えさせてもすぐ飲み込まれてしまうかもしれません。したがって、市場経済を公共経済や社会連帯経済と両立できる形に社会化していく必要があると思います。私は先ほどの報告で、共助社会を支える市場経済の在り方として共感資本主義を提唱しましたが、それは公共経済や地域連帯経済をも支える仕組みになるのではないかと思います。

共感資本主義経済では、企業の活動が可視化されます。企業が、自然や地域、顧客や社員、サプライチェーンに対してどのような行動をとり、どのような影響を与えているかが分かる経済です。その情報の中に公共経済や社会連帯経済とのかかわり方も入れられるかもしれません。また共通の指標として SDGs が使えるかもしれません。いずれにしても、両面というか三面で同時に進めていくことが必要だと思います。

佐藤 星野さん、角度を変えてですけど、国連外交のこともよくご存じのところで、先ほど藤田さんおっしゃったみたいに、今年の 6 月に ILO が社会的連帯経済の定義をあらためてしたわけですね。社会的連帯経済、実は英語圏ではあんまり注目されていませんが、南欧とかラテンアメリカ圏ではかなり議論が続いてきて、ようやく今、国際潮流のメインストリームにきたと思うんですけど。人間の安全保障もそういうところがあって、はやる地域と、はやらない地域があると思うんです。この辺のことってどのように見ていらっしゃいますか。

星野 痛いところを突きますね。必ずしもいいアイデアとか、自分でもこれはすごく大事なアイデアだなと思うものがそのまま普及するかというと、そうではないというのが世の中の現実なのかもしれないと思わされることが間々あります。

外交官時代にもそれなりの葛藤はありました。そうしたときに自分なりに一つ、決着をさせたことがあるんです。それは人間の安全保障という概念が広がること。例えば、今回のような報告書ができるためにはそれなりの下準備をしたわけなので、それができたことは非常にうれしいわけですが、たとえそうした報告書の作成ができなくても、人間の安全保障とは別の言葉が使われたとしても、私が人間の安全保障という言葉で目指そうとしたことと同じような結果が得られたならば、それはそれでいい、という割り切りです。

つまり、大切なのは、人間の安全保障という言葉が残り、広がることなのか、人間の安全が確保されて、誰一人取り残されないという状態が実現されることなのか、どっちなのか言われたならば、僕は何の迷いもなく、圧倒的に結果が得られることを選びます。そうした結果をもたらす道筋の一つとして、私は人間の安全保障という政策枠組みが貢献できることがあるという確信があるので、この概念は広げて、それで予算を確保したり、それを政策として実現してくれる動きは喜んで支援をするわけですが、仮に人間の安全保障という言葉には抵抗する勢力があったからといって、対立するのではなくて、その人たちが別の言葉を使って、それでも同じような結果を出してくれているのでしたら、それは是認するということが一つの考え方だと思っています。

ですから、社会連帯経済という表現やアプローチが受ける所とそうでない所があるのは当然だと思うのですが、しかし、大切なのは、そこで得られる結果、実現したい結果が何なのかというところをしっかりと見据えておけばいいのではないかと私は思っています。

佐藤 冒頭、星野さんはアイデアの力、影響力っていうこと、おっしゃっていたわけで、人間の安全保障っていうのも一つのアイデアだし、社会的連帯経済、また一つのアイデアだと思うんですね。そうすると、もちろん SDGs 自体も一つのアイデアなわけだし、だからこそ日本では、こんな SDGs ブームになってるわけなんです。では次に、個人っていうか、人のレベルに落としてみたいんですけども、支援を必要とする人、あるいは vulnerable な人と誰が連帯するのか。誰との連帯が望ましく、また、その直接のステークホルダーでない人たちは、彼らと連帯することによって何が得られるのかってということについて、まず堂目さんからいかがでしょうか。

堂目 最初にお話ししましたように、実は取り残されているのは capable な人なのか vulnerable な人なのか、いのち輝いているのはどちらなのかという問題があります。

課題を自分ごとにしていくことは、capable な人が vulnerable な人をかわいそうだから助けてあげようというのではなくて、自分の中にも「障害」がある、実は誰の中にもある、このことを認めていくことではないかと思います。誰であれ、生きるということは障害を生きるということなのだとということに気づいていくこと。そうすると「誰一人取り残さない」という言葉の意味が変わっていくはずです。あるいは、苦難の中に生きている人に対する見

方や接し方も変わるはずです。助けてもらう側も、助けてもらったから申し訳ないという意識から解放されるのではないのでしょうか。

SSI の活動を始めて以来、この見方を世の中に広めていくことが一番重要ではないかと思うようになりました。vulnerability が持つ隠れた capability、capability が持つ隠れた vulnerability をお互い素直に見いだししていく、結果として、capability と vulnerability の区別が意味をなさなくなる、このことに気づき合っていくという連帯をつくりたいし、それは可能だと思います。

佐藤 恐らく支援、非支援関係が、互換性を持ってるっていうことが連帯だっていうことなんだと思うんですけども、先ほどのプレゼン見て、すごい面白いなと思ったのは、capable の反対は vulnerable であるっていう点なのですが、この対は何か意味があるんですかね。

堂目 capable の反対は incapable なのですが、単に「できない」ではなく、そのために傷つく、弱められるという意味を込めて vulnerable を使っています。

実は、社会は capable な人と vulnerable な人にきれいに分かれるわけではなくて、誰もが自分の中に capable な部分と vulnerable な部分の両方をもっています。しかし、生産への貢献から見て capable な部分が大きい人は自分のことを capable だと思い込んでいる、あるいは vulnerable な部分を見ようとしない。反対に生産性の面で vulnerable な部分が小さい人は他の面でもすべて vulnerable だと思い込まされてしまっていて capable なところに気づいていない。社会課題を解決する中で様々な出会いによって、それぞれが自分の中の見えていなかった部分を見出していくことが大切だと思います。それが「自分ごと化」だと思います。社会課題の解決は社会全体のために行うだけでなく、自分の中にある未解決問題に向き合うプロセスでもあり、それを通じて、どのような状況になっても大丈夫な自分になっていく歩みだとも言えます。

佐藤 星野さん、ご報告の中で保護とエンパワーメントの次に、第三の要素としての連帯っていうふうにおっしゃったと思うんですけども、保護もエンパワーメントもある程度、支援、非支援関係が明らかですよね。でも連帯は必ずしもそうではないっていうふうに思う、この三つはちゃんと相互補完的になるんでしょうかね。

星野 確かに保護、エンパワーメントっていうところは、vulnerable な人たちを保護する、エンパワーするというふうな一方通行のイメージがある動きですね。けども恐らく、これは堂目先生が最初にご指摘されたところだと思うのですが、コロナ禍を経験したわれわれの教訓というのは、われわれは強いつもりでいたのに vulnerable になり、援助される側に回る。これは震災などを経験すれば、特にそうだというふうなことで。日本では昔からお互いさまと言いつつ、ただ、それを気が付かなかったわけです。ですから、保護する側がい

つの間にか保護される側に回るといった現実を考えると、連帯っていうものが自然と出てくるんじゃないかっていうのが。

この新しい報告書を作る側としては、連帯なんてあまりにも当然の言葉ですから、ここはどうして出てくるのかってこと、私自身も疑問に思ったこともありました。ですが、保護とエンパワーメントの関係が、まさに先ほどおっしゃった互換性みたいなところでひっくり返るっていうふうな現状を見据えたときには、連帯しかそれを解く鍵はないのではないか、と思うようになりました。

一つだけここで申し上げると、『誰一人取り残さない』っていう言葉は『leave no one behind』という英語の日本語訳なのですけども、これに対していくつかの指摘っていうのがあってですね。ご存じのとおり、上から目線で保護する、してあげるんだ、というニュアンスがある。『no one will be left behind』、つまり誰一人取り残されない、そういう社会をつくるっていう表現のほうがいいのだろうとも考え、最近は私もなるべく誰一人取り残されない、そういうものに向けてどうするかっていうふうな書き方、『no one will be left behind』という表現にするようにしています。それも連帯をする者たちの中の自分もその1人となっていくのではないかと感じています。

佐藤 藤田さん、この点いかがでしょうか。

藤田 おっしゃったことにとっても共感するところがあります。社会的連帯経済の移民の事例を見ていて、そうなんだと思ったのは、難民あるいは移民として、ある国に入って、そこで支援をされ続けることは非常につらいことである。支援をされる立場になってる状況って非常につらいということでした。こうした感覚というのは、聞かなきゃ分からない。

振り返ってみると、自分も支援される立場にずっとなったら、つらい。何かの役に立ってると思ってる状況は、自分にとって気持ちが楽である。そういうことに対する気付きみたいなものは、私個人的にはすごい大事だなと。それを仕組みとして、どうしてやっていくのかということが大事で。立場が入れ替わるというような在り方。だからこそ時間銀行であったりとか地域通貨であったりとか、役割をお互いに入れ替わるということですよ。そういうものを仕組みとして、どうつくっていくかが「お互いさま」ということの仕組み化なのかなと思いました。

一方、今回、私ベトナムに行って、ホーチミンシティのスラムに行って、いわゆる人身売買に遭った人たち、公園に住んでいる若いセックスワーカー、ドラッグユーザー、それから高齢者、あるいは何代にもわたって国籍、住民票、戸籍がない人たちの話をたくさん聞く機会を得たのですが、本当に大変な状況にあります。そのような人たちが、人に自分たちのことを語り始める、立ち上がっていくには時間や、人と人との出会いが必要だと学びました。そういう出会いを通して、その人たちの立場もだんだん変わっていく。その話を聞いている私たちのほうも立場が変わっていく。関わってる NGO のスタッフも、生まれながらずっとホー

ムレスの環境で虐待を受けながら育ってきた人がワーカーとして働いているのですが、立場が変わっていく、状況が変わっていきます。どれだけお互いに相対化しつつ、共感しつつ、相手がどんなことが嫌なのか、つらいと思うのかっていうことを、自分の体の中に理解していくみたいなことをシステムチックにやっていくっていうことが大切なのかということを、この週末に感じました。

佐藤 今、藤田さんのはすごくミクロな部分でおっしゃってたんですけども、堂目さんと星野さんがおっしゃった、もう少しマクロな部分でも、関係が甲乙、優劣っていうふうに固定しているものを相対化していく、流動化していく。そのための工夫としての連帯っていうのがあるんだっていうの、今、お話を聞きながら感じました。

時間も残り少なくなってきたので最後になるんですけども、一応きょうのセミナーの目的は、次のSDGs 指針改定に向けて、何か提言があるかしらっていうことなんです。もちろん皆さん現在のSDGs 指針がどんなものかっていうことについて、そんなにご存じじゃない方も多いと思うんですけども。きょうのこういう議論を踏まえて、日本の実施指針を、これから変えていくためにはどんな視点、どんな提言があり得るのかっていうことを教えていただければと思いますが、これは藤田さんからいきましょうか。

藤田 うろ覚えですが、現在の実施指針のところは各セクター、アカデミアがどうするとか、市民社会がどうするとかっていう役割のところ、どういうセクターがどういう役割を果たすべきかみたいなことがざあっと並んでると思うのですが、立場を超えた共通のものをどうしていくかということに関しては、記述がない。課題であるとか立場であるところを、どうやって超えた共通のものをつくっていくのかというところが欠けてると思います。そこは強化されるべきところだというふうに思います。

佐藤 ありがとうございます。星野さん、いかがでしょうか。

星野 いくつかの次元で、これに対しては答えできることがあるのかもしれませんがけれども、詳しい実施指針、あまり読んでないので、申し訳ないのですが。あまり細かい議論にならないで、全体の方向性とか流れとかっていうふうなことを見失わないようにすることも大事だと思います。SDGs が求めていることは大きな意味で行動変容だと思いますし、意識変容だと思います。

そして、先ほどの藤田さんの言葉にさらっと出てきたムーブメントをつくるということだと思うんですね。私としては、ムーブメントつくることに対しては、大きな動きも身の回りの小さな動きも、みんな歓迎したいと思っています。たとえ、小さな動きでも、それがほかの動きとも連動し、波になって広がっていく余地も十分にあるのです。ですから、人々を motivate するというのか、とにかくやったらいいんだよと元気づけるような、勢いをつけ

るようなメッセージを置いておいてほしいなという気がしています。そうでないと政策の羅列みたいなことに終わってしまわないか、気になります。

人間の安全保障については、「誰一人取り残されない」とする SDGs と結局同じじゃないかといった議論をされたときがあるんですけども、それに対して私は、人間の安全保障は、SDGs と問題意識が重なるところも当然であります。SDGs が生まれる前に出てきた概念で、SDGs の目標年である 2030 年を越えても存在するもので、普遍的に重要なんだといった説明をしています。とにかく SDGs には 2030 年という時限が定まっているので、その次の目標に関する議論が万博の 2025 年後ぐらいからは本格的に考えていってほしいですね。

私は既に座長として、広島県とポスト SDGs の議論をしています。SDGs の D はディベロップメントですね。つまり、開発です。しかし、開発と言っている限りにおいては、どうしても範囲が限られていて、平和にかかわる議論が脇に置かれかねません。特に広島との議論では核軍縮問題、とりわけ核廃絶の問題に注目しており、これが地球のサステナビリティにとっては核廃絶が不可欠だと確信を持って議論をしているわけなんですけれども、そういうようなことまでもスコープの中にしっかりと入れてポスト SDGs の目標を作っていくことを日本から発信してもいいことなのですね。私たちは、「持続可能な開発目標」の次は「持続可能な平和と繁栄を全ての人」といったキャッチフレーズを実は作ってしまっているのですが、そうした未来志向の目標が必要です。SDGs を達成するだけでも大変なのですけれども、その枠を超えた、プラスアルファについても、さらに議論していくことも有益と考えています。

佐藤 今のは、まさに beyond SDGs のお話だと思います。先ほどから星野さんがおっしゃっているように、小さいいろんな動きがまとまって、ある臨界点を超えるっていうムーブメントというのはありうると思います。でもそれは勝手にみんながやっててなるんじゃないかと、誰かがオーケストレートする人がいるんじゃないかと思うんだけど、それは必要ないんですかね。

星野 オーケストレートできればいいんですけれども、1 人が全てっていうのはなかなか難しいのかもしれませんが、どうでしょうね。誰一人取り残されないで救われるというのもいいですけれども、「誰一人取り残されないで活動する」という方向で前進していくと、どこかで臨界点を超えることになるかもしれません。

佐藤 堂目さん、いかがでしょう？

堂目 きょうは capable と vulnerable の話をさせていただき、またそれを取り上げていただき、ありがとうございました。私にとっては、これが一番のポイントです。

もう一つのポイントは、近代を乗り越えていくことです。ある意味で、SDGs も近代の枠

の中にあります。背後にある人権思想も近代の産物です。もちろん、人権は非常に大事な概念で、国連が人連宣言を出したことは、歴史上の奇跡だと思っています。

しかし、人権概念は、個人主義というか、一人一人が分断されているようなイメージを与えてしまい、命はもともとつながっているという発想にはなりにくいように思います。私とあなた、私とわれわれ、私と自然、というように個人を自立した存在として扱い、それ以外のものから分けてしまう。そうしておいて、連帯という概念で束ねていこうという考え方で。そうではなくて、命はもともと一体である。その一体となったものが変化して色々な現象が起こっているという見方もできるはずです。こうした発想の転換を世界全体で試してみることも重要だと思います。SDGs の次のゴールを設定いくときに、ばらばらの個人を国が束ね、国と国が連合するという、個を積み上げていくような発想ではなく、もともとは一体となって生きているという発想で考えてみるのもよいのではないのでしょうか。

いのちの捉え直しは、万博のテーマにもなっています。色々ないのちの在り方を考え、人間だけではなく、自然のいのちも考えていこうとしています。人間中心の発想ではなく、人間も含めた自然中心、いのち中心の発想で未来社会をデザインする試みもなされると思います。

こういったことも含めて、近代を超える機会として SDGs があると言ってもいいでしょう。その意味では、SDGs も歴史上の転換になると思います。人権思想の延長にある世一つの現象と捉えながらも、逆転の発想で様々な価値を捉え直してみる。別々のものをくっつけるのではなくて、もともと一体なのだ、それに気づこうという考え方を広めるムーブメントになり得ると思います。

佐藤 今のお話で特に堂目先生おっしゃってたような近代を超えるっていう部分について私も非常に共感するところがあります。産業革命以降の地球温暖化というのが人新世の認識の核にもあるわけなので、本来 SDGs が持つてるのは、近代の考え方を乗り越えるものなんだけれども、恐らく日本政府の SDGs 取り組みは、近代主義は乗り越えてないんですよね。

だから、経済成長も働きがいもって言うてみたり、Society 5.0 っていう形で、これまでの延長線上の技術で目の前の課題を解決することを志向してる部分があって。そこが本質的に SDGs が近代主義を乗り越え切れないところではないかと思っています。実は、私自身は堂目さんおっしゃったみたいに、近代を乗り越えるっていうところまでちゃんと踏み込もうよっていうところが SDGs の実施指針に書き込めればいいけど、それは無理だなと思うんです。しかしこうした議論は必要かなというふうに思っております。

ということで、あと 5 分なんですけど、一応私のほうでは皆さんからお聞きしたいことは聞きましたので、最後に一言ずつ皆さんから何か言い残したこと、ぜひ言っておきたいっていうのがあったら、順番にお願いします。藤田さん、どうぞ。

藤田 私もともと、きょう登壇する予定じゃなかったのですが、こんなにいっぱいしゃべる機会

を与えていただいて、ありがとうございました。とても勉強になりました。『みんなの SDGs』を、これからどうしていこうかっていうこと、私たち、とても悩んでるところがあります。取り残されがちな人々にフォーカスし過ぎなんじゃない？みたいな指摘もあって。いろんなかたがたが関わってるところに私たちの『みんなの SDGs』の特性があるので、そこを生かし切れてないんじゃないのと。ちょっと事務局長、ちゃんとやってくれないかな、みたいな感じがあってですね。ぜひ皆さんからいろいろアドバイスいただきたいなというふうに思いました。きょうはいろんな多角的なお話伺えてよかったです。ありがとうございます。

佐藤 ありがとうございます。星野さん。

星野 『みんなの SDGs』の活動に参加させていただいたのは初めてですけど、過去 2 年半の動きもご紹介いただきまして、大変感銘を受けましたし、そういった一つ一つの動きがどんどん広がり、連帯が連帯するような流れになっていく、そうしたムーブメントになるようなことを期待したいと思います。

『みんなの SDGs』というのを、『みんなの SDGs』にしていって、そして全員が参加するような、つまり、誰一人取り残さずに活動をするという。小さいことでもいいですし、できることからでもいいですけども、夢は大きく、大きな変化、転換につながる流れをつくることを目指すことは大切です。私もささやかながら貢献したいと思ってますから、一緒にまたこれからも活動できればと思います。よろしくお願いいたします。

佐藤 ありがとうございます。ぜひよろしくお願いいたします。堂目さん。

堂目 今日はありがとうございました。初めて参加しましたが、現場を見てきた生の声というか、背後から当事者たちの声が聞こえてくるような迫力のあるお話を聞くことができました。社会連帯経済も考えていかなければならないことに気づかされました。短時間でしたが、私自身、大きな学びになり、非常にありがたい場でした。

万博については、あまり盛り上がってないと聞きましたが、関西のイベントではなく、国を挙げてのイベント、あるいは世界のイベントですから、今日お話ししたような視点で盛り上げていきたいと思います。テーマの「いのち輝く未来社会のデザイン」は、いのちとは何か、どうつながっているのか、輝くとはどういうことか、という重要な問いかけを含んでいます。声を出せないでいる人たちにも何とか声を上げてもらって、世界に響かせるようなひとつの大きな声にしたいと思っています。ぜひ「みんなの SDGs」のご皆さんにも参加していただき、2025 年以後の連帯と活動のためのジャンピングボードにしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

佐藤 ということで時間になりましたので、取りあえず、これでパネルディスカッション終

わります。木村さん、マイクお返しします。

木村 登壇者の皆さん、それから藤田さん、佐藤さん、白熱したパネルディスカッションでの議論、どうもありがとうございました。本日、出された論点を、『みんなのSDGs』のほうでいくつか取りまとめまして、来週月曜日が締め切りの意見、提案のほうに進めてまいりたいと思います。本日ご参加いただいた皆さまも各自、個人単位でも提言を募集しておりますので、ご関心ありましたら、チャット欄のほうにお送りしましたウェブサイトをご覧くださいければと思います。

本日はこれにて終了となりますが、参加した皆さまに向けてアンケートを準備しておりますので、今後『みんなのSDGs』に期待することや、本日のセミナーについてのご感想などございましたら、ぜひご記入のほどよろしくお願いいたします。それでは、長時間にわたりオンラインセミナーにご参加いただきまして、どうもありがとうございました。これにて終了とさせていただきます。

一同 ありがとうございました。

(了)